

浅井学園の発展と創立者の足跡

著者	浅井 洋子
雑誌名	北方圏生活福祉研究所年報
巻	6
ページ	1-24
発行年	2000
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001491/

浅井学園の発展と創立者の足跡

浅井 洋子（北海道ドレスメーカー学院長）

抄 録

学校法人浅井学園の創立者・浅井淑子先生の教育の真髓を考究するために、創立者の出生から逝去までの個人史をたどり、創立者をめぐる人々の動きを整理し、併せて、現・北海道ドレスメーカー学院の歴史的発展を概観した。その中で、「建学の精神」や「教育の理念」が生まれた経緯などについて、今一度史料的な確認を行い、できるだけ事実に基づきながら探究した。以前に整理された創立者に関する「年譜」に、今回の再検討で発掘された史料を加え、より具体的でより詳細なものにして添付した。

関連して、今後の専門学校の在り方や北海道発信のものの見方・考え方についても私見を述べた。

キーワード：浅井学園，浅井淑子，浅井猛，浅井幹夫，浅井洋子，ドレスメーカー女学院，北海道ドレスメーカー女学院，北海道ドレスメーカー学院，各種学校，専門学校，北海道発信のものの見方・考え方

I はじめに

— 一番ヶ瀬康子先生のお言葉を受けて —

一番ヶ瀬康子先生（北海道浅井学園大学顧問・長崎純心大学教授）は、北海道女子大学（現・北海道浅井学園大学）の『北方圏生活福祉研究所年報』（第4巻，pp. 1～4，1999・3）に、論文「浅井淑子先生より学ぶ—北海道発のものの見方—」を寄稿され、浅井学園の創立者である亡き母・浅井淑子先生（以下、「創立者」又は「母」又は「彼女」という）の生涯・業績・教育思想について語ってくださり、浅井学園の関係者に力強い勇気を与えてくださった。

このことに感謝し、私も、二代目継承者の立場から今一度、浅井学園の母体である北海道ドレスメーカー学院を中心に、母や父が40年間理想として掲げ成し遂げてきたものを振り返り、整理してみることにした。昨年創立60周年の節目を迎えたので、今後継承していかなければならない真の教育的使命・役割は何か、を確認する機会とするためでもある。

この一文をまとめるにあたって、私なりに学園関係の資料の洗い直し調査、親戚・縁者に対しての聞き取り調査などを行い、改めて第一次資料から整理してみた。その結果、若干ではあるが、これまでほとんど伝えられていなかったことを明らかにすることができ、誤って伝えられていたことを修正することもできた。この点、かなり史料価値のあるものに仕上げることもできたと思

う。（本稿では、身内に関しては、敬称を省略して述べることを、あらかじめご了承ください）

この拙稿が、一番ヶ瀬先生の玉稿などと併せて読まれ、浅井学園の教育の理解を深めていただくことに、少しでも役立てば幸甚である。なお、身内であるが故に、どうしても主観的で身びいきな私的表現が含まれてしまうことを、最初にご理解願ひ、お許しをいただきたい。

また、一番ヶ瀬先生に触発されて、北海道発信のものの見方・考え方についても、私なりに若干の見解をまとめてみた。識者のご批判とご指導をいただくことができれば、誠に幸いである。

II 創立者の人生と教育姿勢

まず、創立者である母の個人史について述べる。ただし、創立者の生涯・業績・人物像については、既に多くの人によって語られているので、ここで、その詳細を繰り返す必要はないであろう。

機会があれば、①最初に挙げた一番ヶ瀬先生の論文、②『北海道女子短期大学研究紀要（浅井淑子学園長追悼号）』14号，pp. 1～12，1980・12，③梶浦善次ほか「私学の振興と服飾文化の普及 浅井淑子」『北海道開発功労賞 受賞に輝く人々（昭和55年）』北海道総務部編，北海道発行，pp.139～209，1981・3，④学校法人浅井学園編集・発行『追想—浅井淑子を偲ぶ—』203Pp.，1985・11，⑤『浅井学園創立五十周年記念誌』（学校法人浅井学園発行，135Pp.，1989・10）などを参照いただきたい。

服飾文化界の指導者及び服飾研究家としての功績、私学の教育者・経営者としての功績、並びに社会教育指導者としての功績などについては、全面的に上記の文献に譲り、ほとんど本稿では触れない。

学園の歴史についてはⅢで述べるので、以下は、創立者の個人史を中心に、娘として二代目として、私なりの主観的な思いを交えながら、いくつかの事柄（娘だから書けることを重点に）を断片的に述べるにとどまる。（项目的に整理した資料は年譜を参照いただきたい）

1. 創立者をめぐる人々と学園の進展

1) 学園創設以前

母・淑子は、札幌市の中心部、南1条西5丁目1番地（現在の札幌日栄ビルの所在地）で、薬局を営む両親・渡邊政助（薬剤師）・ワカの子供（7人きょうだいの第2子）として、1917〔大正6〕年7月4日に生まれた。家族関係は次のとおりである。

父	政助	1886〔明治19〕年2月26日生	78歳没
母	ワカ	1893〔明治26〕年5月2日生	68歳没
兄	博	1916〔大正5〕年8月6日生	0歳没
本人	淑子	1917〔大正6〕年7月4日生	62歳没
弟	勇二	1921〔大正10〕年1月2日生	54歳没
妹	道子	1922〔大正11〕年3月20日生	1歳没
妹	敏子	1924〔大正13〕年1月15日生	1歳没
弟	純男	1927〔昭和2〕年2月28日生	19歳没
妹	眞佐子	1928〔昭和3〕年7月26日生	17歳没

兄や下の妹が幼少で死亡していたこともあって、長女であった彼女は、両親の期待の娘、自慢の娘として、厳格に、しかし愛情を込めて大切に育てられた。基礎教育は、次の学校で学んだ。

1924〔大正13〕年4月 札幌師範学校附属小学校入学
 1930〔昭和5〕年3月 札幌師範学校附属小学校卒業
 1930〔昭和5〕年4月 小樽緑丘高等女学校入学
 1931〔昭和6〕年4月 東京国華高等女学校編入学
 1934〔昭和9〕年3月 東京国華高等女学校卒業

4年間の高等女学校の生活は、彼女の生涯を方向づける貴重な体験となり、確固とした意識の形成に大きな役割を果たした。その一つは「女医として人のために尽くしたい」という思いであり、もう一つは「明るい家庭を築くためには、女性が自立できる能力を身につける必要がある」という考えである。

前者は、私立・小樽緑丘高等女学校（現・札幌山の手高等学校の前身）の1年生の後半、重い眼病を患って入院した時、医師や看護婦の方々から献身的な治療と看護を受けたことに感激し、医者として人のために尽くしたい、と思ったことに始まる。後者については、入院治療

が長期欠席につながり、落第を避けるための転学・編入学がきっかけであったが、東京で送った生活が深く関係する。東京での日々は、育てられた札幌の家庭とは違った様々な家庭生活の姿を、彼女に見聞・体験させた。彼女は、それらを通して、当時の一般的な家庭生活―婦人は主人に従属する―への批判的な思いを強め、女性の自活の能力の形成による女性の社会的向上という理想を次第に意識し始め、女学校を卒業するころには確固たる意識にまで成長させていたのである。

彼女は、私立・東京国華高等女学校（現・東京都荒川区、5回の校名変更後、1958〔昭和33〕年3月廃校）卒業と同時に、両親に相談しないで東京女子医学専門学校を受験し合格した。彼女の父・政助はもともと医学関係の人なのだから反対はしないであろう、と思っていたが、父に進学を依頼したところ、父は非常に厳格な人で「女が医者になってどうする」と猛反対。断固として、この進学を許してくれなかった。手に入れた合格も空しく、思いを断念せざるをえなかった。ただし、こうした考えは、当時の日本では当たり前のことだった。特に彼女の父だけがコチコチ頭の持ち主ではなかった。

いつの間にか、彼女は男尊女卑の日本の思想に反発を感じるようになっていた。建学の精神である「女性の自立（二代目になり人間の真の自立）」という精神は、このころに強められたのである。本来、手掛けたかった医療や福祉に対する思いは、教育の理念である「愛と和」の精神に込められた。今日まで脈々と引き継がれたこの精神は、今も変わらず学問の追究、技術の習得とともに「人間教育」の中に生きている。

そこで、彼女は、方向転換をはかった。女だてら（あえてこのような言い回しをさせて頂く）に出来る職業へと志を立て直し、「家政分野」を考え「東京へ出て洋裁の勉強をし、洋裁で身を立てたい」と願ったものの、「女が職業を持つなんて……」と、またもや両親が反対。家庭の経済があまり裕福ではなかった？こともあって、東京への志には反対だったのかもしれない。しかし、彼女の意志は強かった。自立した女性になる夢を決して捨てようとはしなかった。家業を手伝いながら、近所の塾で洋裁を学び、仕立物の内職をして、自分の力で再出発の準備を整える。女学校卒業から2年半後、彼女の願いは限界にきていて、金銭的な援助を受けないことを条件に両親を説得し、一人東京へ飛び立ったのである。

1936〔昭和11〕年9月（19歳時）、既に「ドレメ」の略称（愛称）のもとに斬新な洋裁教育で全国的に有名であった杉野芳子先生の「ドレスメーカー女学院」（私立・杉野学園。東京都品川区に現在も所在）の速成科に入学。叔母（母・ワカの妹）である小林ナツ（旧姓・工藤）が、父に内緒で、東京での当初の資金面の援助をしてくだ

さった。しかし、両親の反対を押し切った状況は、甘えの原理はなく、辛い日々であった。間で縫製のアルバイトをしながら生活費を得ていた。睡眠は平均3～4時間であり、徹夜の続く日が重なることもあり、とうとう鳥目(夜盲症)になってしまった。いわゆる苦学生だった。今でこそアルバイトは当たり前で恥ずかしいことではないが、当時は、それはそれは辛いものだったと思われる。しかし、強靱な精神を磨く機会ともなった。

のちに、『浅井学園創立40周年記念誌』に「感謝のうちに迎える40周年」という挨拶文の中で、「常に“七転び八起き”—幾多の試練を経て……」と、彼女は述べている。幾度となく立ちだかる試練は、以下に述べるように、学園創設以後も、死の直前まで続くのである。

ドレスメーカー女学院での修業は次のとおりである。

1936〔昭和11〕年9月 速成科入学 19歳時

1936〔昭和11〕年12月 速成科卒業 19歳時

1937〔昭和12〕年6月 研究科入学 19歳時

1939〔昭和14〕年5月 師範科卒業 21歳時

上京して2年9か月後、実質2年4か月(速成科4か月・研究科1年・師範科1年)の教育・訓練を受けて、1939〔昭和14〕年5月、ドレスメーカー女学院(現・ドレスメーカー学院^(注))を卒業した。

(注) 極めて多くの人が、校名の前に「東京」「杉野」「杉野学園」「杉野女学園」などを付けて表記するが、正式な校名には、創立時も現在もなにも付いていないので、正しい表記法ではない。「ドレスメーカー女学院」の認証校・指定校等の形で、隆盛期には全国津々浦々に「〇〇ドレスメーカー女学院」が存在したのであるが、創始校は冠の付かないままである。

2) 学園創設以後

「ドレスメーカー女学院」卒業後、母はすぐ札幌に帰り、1939〔昭和14〕年9月、札幌市南1条西5丁目で彼女の父・渡邊政助が経営する薬局の2階を借りて「北海道ドレスメーカー女学園」を開校した。22歳になったばかりの時である。

いま「女学園を開校した」と簡単に書いたが、これまでの経緯からみて、両親の賛成や協力を得ることは、非常に困難ではなかったか、と誰もが想像するであろう。実際は、そのとおりであった。しかし、後述するように、事実上、開校時の2階ばかりでなく、翌年には、父から1階の薬局の店舗さえも譲り受けて教室としている。仮に大変な理解者であったとしても、札幌の中心部の一等地で経営する薬局が店舗を閉鎖してまで娘に協力することは、とても考えられないことであろう。この時の事情などについては、前掲の文献③などに詳しく述べられているので、ここでは省略するが、この時期に、父・政助

は、高額な債務を背負うという事態に直面した。彼女は、この渡邊家の経済的危機を救い、その代償として建物の使用权を得たのであった。彼女にとっては、夢を実現するチャンスであった。

後で述べるように、翌年「北海ドレスメーカー女学院」と改めた学院の経営は順調に推移するが、それも束の間、1941〔昭和16〕年12月の太平洋戦争勃発。戦時色が強まる中での学院経営は、徐々に困難になっていった。

そうした中、彼女は、1944〔昭和19〕年8月10日(27歳時)に、当時「株式会社今井商店(現・丸井今井百貨店)」の交通公社部門に勤めていた治部信夫(31歳)と結婚した。治部淑子となり、札幌市北3条東1丁目1番地で居住。しかし、結婚後1週間も経たないうちに夫は召集された。彼女は戦争花嫁であった。

既におなかに子供を身籠もっていた彼女は、1945〔昭和20〕年5月1日(27歳時)、娘・俱仁子を出産。悲しいことに、同年同月18日、生後半月の我が子を敗血症で亡くした。夫も、1945〔昭和20〕年6月17日(32歳)、激戦の沖縄本島島尻郡で戦死した。最愛の子供に続いて夫を亡くしたショックは大変なものであった。

身内の不幸は相次いだ。1946〔昭和21〕年6月1日、妹・眞佐子を結核で亡くし、続けて同年同月22日、弟・純男を奇病で亡くしたのである。純男は、海兵団で空襲に遭い、洞窟に逃げ込み、生肉を食べたそうである。そのことが原因で、当時の医学では治せない奇病に罹り、苦悩の最期を遂げた。この二人は、17歳と19歳であったが、彼女にとって「女性自立の思想」の最大の理解者であり、かけがえのない存在であった。

両親は健在であったが、7人いたきょうだいも、既に1943〔昭和18〕年6月に結婚し別に家庭を持っていた弟・勇二と、二人だけになってしまったのである。(渡邊政助・ワカ夫妻及び渡邊勇二夫妻などの、その後の様子については省略する)。

3) 太平洋戦争終結以後

わずか1年強の間に4人の大切な人を次から次へと失った母は、悲嘆にくれ、カトリックの信仰の道に入り、敬虔な信者になった。当時の札幌・円山カトリック教会の主任司祭は、私たちの父・浅井猛の兄・浅井正三神父様(1999〔平成11〕年12月16日逝去)で、すぎる思いで祈る彼女に救いの手を差し伸べた。彼女は、1946〔昭和21〕年12月、クリスマスの日に受洗し、クリスチャンネームは「アナスタジア(ギリシア語で『復活』を意味する)」となる。のちに、母の生き方や仕事は、「信仰に基づく母性愛」によるものと評価されるが、教育運営の基本的信条として説かれ、学園全体の伝統として実践されている「愛と和」の精神は、この時に深められ、確固

たるものとなったのである。

このころ、神父様はまた、偶然の機会ではあったが、当時「東京栗林商船株式会社」に勤務していた弟・浅井猛(私たちの父)に彼女を引き合わせたのである。そして、約1年間の東京と札幌を往復する交際の後、1948〔昭和23〕年4月15日に二人は結婚した(治部姓のままであった彼女は、1948〔昭和23〕年3月、一時渡邊姓に戻り、再婚後は浅井姓を名乗ることになった)。居所を札幌市北1条西8丁目に構え、夫・猛は、経営・事務部門の責任者となり、二人三脚による学校運営が始まった。このころは、家庭的にも平安な日々が続き、二人の子供(私の兄・幹夫と私・洋子)をもうけた。

1948〔昭和23〕年4月15日 浅井猛(1920〔大正9〕年1月8日生まれ)と結婚 30歳時

1948〔昭和23〕年9月18日 幹夫を出産 31歳時

1950〔昭和25〕年2月24日 洋子を出産 32歳時

しかし、それも少しの間で、すぐに母は、身体的に試練の時期を迎えることになる。校風を慕って増加する入学希望者に対応するために、後述のように、1950〔昭和25〕年と1955〔昭和30〕年に大掛かりな新校舎建設を実施した。1950年の第1期工事の時には、ちょうど私・洋子の出生の時期と重なり、母は、出産の翌日から校務をしなければならないような状況であった。この時には、心労が原因で頭髮が抜け、30代早々にして白髪となってしまった。1955年の第2期工事の時にも、母は、完成直後から顔面三叉神経マヒとなり、まぶたが開かない状態になり、辛い日々を過ごしている。

一つの大きな仕事を終わらせた後に、大きな病気を背負い込む母は、こんどは、北海道女子短期大学の開学1年後、1964〔昭和39〕年7月、難病であるバージャー病(ビュルガー病、ビルゲル氏病などともいう。閉塞性血栓血管炎。突発性脱疽)に罹った。入退院を繰り返し、松葉杖や車イスで行動しなければならないという生活が、このあとずっと続くことになるのである。

2. 見事になされた二代目への継承

話は飛躍するが、私は、1980〔昭和55〕年2月、29歳の時、母の急逝に伴い、北海道ドレスメーカー女学院の二代目学院長を継承した。

1974〔昭和49〕年4月、24歳で札幌に着任した時、女学院の学科編成は、「オートクチュール」だけであったが、時代のニーズに応える「アパレル産業」と「コーディネーター」を加え、3コース制にした。27歳で学院長代行に就任。病弱だった母の力になれるように努力した。私は、22歳の時からこのドレメを始めたという母の思いをいつも聞かされ、おしゃれの嫌いな、記憶力の悪い、力のない自分に自信がなく悩んだ。その表現が反発・反抗とい

う形で出た時もあった。とにかく、その後は夢中で過ごしてきた20年である。偉大な母の後はかなりしんどかった。「大輪のバラは散った」「ドレメの時代は終わった」とまで言われた。教育という立場を通して、社会的貢献(北海道をはじめ、札幌市などの行政関係や企業の仕事)を積極的にしていた母の空席を埋めるのは大変であった。「見えない穴に糸を通す」「岩をも通す」勢いで、私は走り続けた。30歳という若さが、「無」のものを「有」に出来たのだと思う。また、母が残してくれた有能なスタッフや、当時は父・猛も元気であったので支えてくれ、何とか乗り切ることができた。

思えば、二十数年前、入退院を繰り返していた母は病弱で、病床に就きながら自らの出来る仕事をしていた。例えば、人と人の心のつながりを大切にし、こまめに手紙を書いたり、原稿を執筆したり、また、今でいうセラピー的要素を含めたカウンセラーもしており、スタッフの悩みを聞いてあげたりしていた。どんな逆境の時も前向きで、自分自身に課せられることすべて「神様の試練」と克服し、ときに入院患者の「灯」にもなり、のちに身体に障害のある人たちのためにも力を注いだ。当時20歳という若さで「脊髄カリエス」に罹り車イス生活をしていた遠藤須美子氏(旧姓・小神氏)と知り合い、身障者同士の合同結婚式に立ち会い、仲人をするなど、「人のために生涯を捧げた人」であった。いつも感謝の心を持ち、平安な人だったと思う。「神様の御心のままに」というのが、彼女の持論であった。時間が経った今、母は神様から選ばれた「使徒(キリストに選ばれた人)」に思えてならない。

1979〔昭和54〕年は2月からバージャー病と心臓喘息のため札幌医大附属病院に入院していたが、8月、退院(本当はまだ現場に出ることはドクター・ストップであったのに)。母は、その足で、南は九州から始め、全国を駆け巡り、“お別れのご挨拶”をして回った。ご無沙汰を詫びつつ、気になる人に会った。たまった学生指導も精力的に行い、同年10月15日の浅井学園創立40周年記念行事の記念式典には車イスで出席、見事なご挨拶をされた。ビデオに記録されたそのご挨拶は、「皆様のお陰で今日の発展があり、浅井学園が生かされている学校であり、今後ともたゆまず努力をし続け歩み続けること」の感謝と願い(宣誓)の言葉であった。まさしく死を予測した終始お別れの言葉そのものであった。

3. 理事長の先見性と夫婦協働作業

初代理事長となった父は、先見性があり、母の夢を着実に形にし、さらに発展をさせてきた。その戦略は、周囲の人々にはよく知られているところである。最近よく考えさせられるのは、「もし母が父と一緒にしていな

かったら？」ということである。本来の高い教育への理想を、父の「男性的発想」でみごとに開花させた。私の子供のころ、母が言った言葉を今も鮮明に覚えている。「男の人は凄いわ。10年、20年先を見据え、いつも時代を先取りしている！もし私一人で洋裁学校を経営していたら……」と。

女である母は、自分自身の力の限界を知り、父を信じていた。そして、父を心から尊敬していたし、また、父も、1939〔昭和14〕年から22歳という若さで一人理想に向かってひたむきに走ってきた母の生き方と魅力ある人間性に、尊敬と大きな愛を感じていた。そのパートナーぶりは見事なものであり、この二人三脚が今日の原点である。北海道に“一粒の種”が植えられ、その種が花を咲かせ、実をつけ、今もまだ成長し続けている。母はやり手な女性で「女傑」とまで言われ、その言葉を気にしていたが、母一人ならば、おそらくこのような大きな浅井学園の前進はなかったのではなかろうか。そんなことを考えると、男女差別ではないが、「区別」としてとらえて、男の人の力の偉大さを感じる。そして、父も母もこの北海道の教育界の担い手として大きな力の備わった運命の持ち主であり、またその後このように兄・妹二人が、二代目を継承し役割分担しながら仕事をすることも宿命のように思えてならない。母は「器があっても、大切なことは、そこにどれだけ魂を入れられるか、ということ」と言っていた。

母は、1980〔昭和55〕年1月4日、ハードな父の戦略に力尽きて、旅先の大阪で、62歳という若さで忽然とこの世を去った。持病の心臓病が悪化しての、急性心筋梗塞による急逝であった。

あの時が母の限界であった。救急車で運ばれた大阪の病院で息を引きとった時、死の宣告をされてもまだ信じられず夢中で人工呼吸をしていた私は、北本^{しょうげん}正玄先生から「洋子先生、休ませてあげて下さい。ママ先生には休息が必要です」と言われた。ハッと我にかえった。北本先生は、母の秘書であったが、それ以上に、もう彼なしでは生きられないぐらいすべての「杖」であった。いつも車イスを押し、母を支え、一番母を側近で見ていた人であった。北本先生は、この時のくることを静かに受け止めていた「ただ一人」であった。死亡年齢は62歳であるが、凝縮して生きた母は、普通の人が平均8～10時間睡眠をとるところを4～5時間しかとっていなかったし、それも15歳ぐらいから目覚めて駆け抜けた人生であったので、70歳ぐらいまでは生きたことになるであろう。この時に母から学んだのは、「何歳まで生きたか」ではなく、「この世での任務・使命をどれだけまっとうしたか」が大切であるということであった。

母の功績について一言触れて、この章の終わりとする。

創立者の教育実績・教育姿勢は、当然ながら高く評価された。そのことは、数々の表彰・受賞に輝いていることでわかる。主なものとして、1963〔昭和38〕年3月の『北海道知事賞(第1期北海道総合開発功労)』、1968〔昭和43〕年12月の『北海道知事表彰(私学教育功績)』、1977〔昭和52〕年11月の『札幌市民文化奨励賞(服飾分野)』、1980〔昭和55〕年1月の『正六位・勲五等宝冠章(私学教育功労)』、1980〔昭和55〕年9月の『北海道開発功労賞(私学の振興と服飾文化の普及に貢献)』などがあげられる。

Ⅲ 浅井学園の歴史的概観

次に、各種学校・専門学校などの歴史的変遷を振り返りながら、浅井学園(=北海道ドレスメーカー学院)の位置づけを確認しておきたい。なお、浅井学園の歴史は、前掲の『浅井学園創立50周年記念誌』など、節目に発行された記念誌に詳しく述べられている。

1. 学園創立間もない時期

学校法人浅井学園の原点である「北海ドレスメーカー女学園」は、1939〔昭和14〕年9月5日、創立者・渡邊淑子(旧姓、22歳)によって創立された。

札幌市の中心部である南1条西5丁目において、創立者の父が経営する薬局の2階1間を借用して、生徒は昼間部・夜間部合わせて20人、教師は園長(創立者)ただ1人という状態からの出発であった。公的には、無認可の私塾であった。1939〔昭和14〕年12月には、速成科の第1回卒業生11人を送り出した。

校名の由来は、「ドレスメーカー女学院」卒業時、帰札の挨拶にうかがった時に、杉野芳子学院長先生から、「北海道で洋裁学校を開くのなら『北海道ドレスメーカー女学院』という名を用いなさい」と激励されたことにある。学院長自らが直接、母校の名を使うことを勧めたのは、熱心に学び、優秀な成績で卒業した創立者に、北海道での「ドレスメーカー」の将来を託そうとしたのであろう。しかし、名前の大きさに気後れしたのであろうか、無認可の私塾からの出発であったからであろうか、実際に付けた校名は「北海ドレスメーカー女学園」であった。翌年の校名変更の時も、戦後の校名変更の時も、「道」の1字を加えていない。恩師から授かった念願の「北海道ドレスメーカー女学院」の名を実際に使い始めたのは、後述のように、名に負けないほど発展した12年後の1951〔昭和26〕年6月からである。

教育の理念も指導方法も、母校での経験に強い影響を受けており、「ドレメ式教授法」の強力な継承者・推進者であった。最初から目的とされ、今日まで引き継がれている基本的な考え方は、単に針子や縫い子を育てるの

ではなく、洋裁教育を通して教養ある女性を養うこと、すなわち人間性を育成することである。学園は、洋裁を手段とした豊かな人間形成の場と考えられてきた。

学園の経営は順調な滑り出しで、校風を伝え聞き、学生数が増加したので、1階の薬局の店舗も譲り受けて教室を拡充・整備し、洋裁教育の内容も充実させた。そして、「各種学校」として申請したところ、異例の早さで、翌年の1940〔昭和15〕年6月には、北海道長官から認可がおりた。つまり、役所から“信頼できる学校、将来性のある学校”としてお墨付きを得たわけである。公的機関から正式に「洋裁学校（実業学校に類する各種学校）」として承認されたことは、早々と社会的な信用を得たことであり、以後の発展に大きな意味をもつことになる。校名も「北海ドレスメーカー女学院」に変更した。教師にドレスメーカー女学院出身者など2名が加わり、生徒数は50名を超えた。

このように、本学院は、女子教育の中で、北海道の各種学校の中で最も古い学校の一つであり、家政系分野（洋裁）の草分けである。創立者は、洋裁技術を通しての女性の意識改革、職業人として自立した女性の育成、及び社会に参加できる人材育成を目指した。その着眼は、当時の女性に非常に意義深いものであり、時代を先取りしたものであった。まさしく浅井学園の建学の精神「女性の社会的地位の向上を目指し、女性にふさわしい職業的技能と幅広い教養をもつ自立できる女性の育成」は、この時に示されたのである。

しかし、極めて順調な発展も束の間に終わり、太平洋戦争の突入に伴い、戦時色が強まり、排外思想・外国語排斥が大いに高まったため、洋裁教育はその影響を受けて、非常な困難に遭遇することになった。時局の要請に基づき、1941〔昭和16〕年12月には、校名を「北海洋裁専門女学院」に変更しなければならなかった。

以後、学校経営も苦難と混乱の状態に入り、軍需に直結する教育と労働を強いられる暗い時代となった。1942〔昭和17〕年に入ると、多くの洋裁学校が休校又は閉鎖を強いられるようになり、1944〔昭和19〕年には、北海道庁が各種学校に対する抑制措置をとったため、閉校が相次いだ。しかし、北海洋裁専門女学院は、学院長の強い継続意志と充実した教育内容が認められ、閉鎖命令を受けずに存続できた。

1943〔昭和18〕年6月には、北海道長官令書によって、「北海洋裁専門女学院・国民勤労報国隊」（教師3人・生徒31人）を編成し、学院長が隊長となって教師・生徒とともに軍需工場^{ていしん}で奉仕活動に挺身しなければならなかった。

2. 1945〔昭和20〕年以後の時期

1945〔昭和20〕年8月15日の太平洋戦争の終結によって、人々は戦争時代の重苦しさから解放された。同年12月、文部省学校教育局長から出された通達によって、各種学校の戦後処理がなされたが、本学院は、同年12月いち早く、再び「北海ドレスメーカー女学院」と改称し、創立時と同じ所在地で一時休校状態にあった洋裁教育を再開した。少数精鋭を信念に定員を40人とし、速成科（4か月課程）を基礎にした研究科（8か月課程）と師範科（1年課程）の2課程を設けた。いずれも入学資格を旧制高等女学校卒業とし、入学試験を実施した。昼間部と夜間部の2部制にし、さらに月水金組と火木土組に分け、できるだけ多くの学生を指導できる体制を作った。校訓「明るく、正しく、らしく」は、この時に定められたものである。

1947〔昭和22〕年3月制定の学校教育法の中で各種学校が規定され、各種学校は「学校教育に類する教育を行うもの」と位置づけられた。「学校教育法」に基づき、本学院は、北海道知事の認可を受け、1947〔昭和22〕年4月から、洋裁教育を主に行う各種学校の一つと位置づけられ、いよいよ本格的に教育を高めた。この年の10月には、北海道初の記念すべき第1回ファッションショーを開催した。以後、本学院の伝統行事として毎年実施し、服飾界に大きな影響を与えた。

本学院は、1948〔昭和23〕年10月、申請書を提出して、創立者の母校「ドレスメーカー女学院」の指定校になっている。指定校とは、ドレスメーカー女学院の認証校（ドレスメーカー式洋裁教授法の実施の認可を得ている学校）であって、平素同学院と密接な関係をもち、同学院の正しい教授法に基づいて指導・教育に当たっている、と同学院から認められた学校をいう。戦後の混乱期に急増した洋裁系の各種学校の中に、ドレメ系統学校の名をうたう詐称の学校が横行したことなどに対処するために、同学院とその同窓会が設けた制度である。ドレメ系洋裁教育の権威を象徴するものとして、後々まで厳然として存在している制度である。

戦後の混乱期をくぐり抜けた本学院は、新しい時代の若い女性の憧れの的となり、入学定員の10～15倍に達するほどの応募者があり、隆盛を続けた。できるだけ入学希望者を受け入れるために、教育体制を整え、定員増を図ることになった。北海道ミシン株式会社から、旭川市4条9丁目にあった「北海ドレスメーカー」の教育面の担当を依託され、1949〔昭和24〕年10月から校名を「北海ドレスメーカー女学院旭川分院」（分院長・老久保小夜子先生）と改め、経営傘下に加えた。このころは、洋裁・和裁の各種学校の増加が極めて著しく、1949〔昭和

24] 年度には全各種学校の半数を超えるまでになり、洋裁・和裁学校が各種学校の「代名詞」となった。

本学院は、学生数の増加に伴い、広い土地を求めているが、1950〔昭和25〕年2月、現在地の札幌市（中央区）南4条西16丁目に校地420坪を購入し、念願であった校舎建築の計画を具体化した。直ちに校舎新築第1期工事を着手し、同年4月に完成した。記録によると、この年の4月現在の在学生総数は412人（昼間部；本科153人・師範科115人、夜間部；速成科73人・研究科42人・師範科29人）で、専任教員は13人であった。

そして、1949〔昭和24〕年12月公布の私立学校法によって、私立学校は「学校法人の設置する学校」と規定されたことから、これに基づき、本学院は、北海道知事の認可を得て、1951〔昭和26〕年6月に「準学校法人北海道ドレスメーカー女学院」（理事長・浅井猛）を創立し、校名を「北海道ドレスメーカー女学院」（学院長・浅井淑子）と改称した。「学校法人」に「準」の字が付いているのは、本学院の場合、私立学校法第64条に規定する「専修学校又は各種学校のみを目的とする法人」の設立であったからである。

引き続き、校舎の拡張が行われ、1952〔昭和27〕年4月には、校舎第2期工事及び第2校舎新築工事が完了した。同年10月には、札幌市大通り西20丁目に新校地150坪を購入し、第3校舎及び寄宿舎を新築した。

1953〔昭和28〕年1月、隔月刊の『北海道ドレメ新聞』が創刊された。これは、B4判4～6ページ組みで、在学生の新聞編輯部（生徒自治会所属）が編集し、学園が発行するものであった。多彩な内容で編集された。1957〔昭和32〕年8月号（第25号）からは月刊となり、また、1972〔昭和47〕年1月号（第184号）からは発展的に『浅井学園新聞』（A3判、4～6ページ組み）と改め、学園職員の編集で現在も発行されている。

1954〔昭和29〕年4月には、昼間部に3年目の課程として新しく「高等師範科（デザイナー科）」も設置し、本科（1年目）・師範科（2年目）とともに修業年限各1か年の3科がそろった。ほかに、その年によって開設科は異なるが、短期修了の制帽科・裁断科・編物科なども設けられた。

1955〔昭和30〕年12月には、鉄筋コンクリート4階建て620坪の本校舎が完成し、1956〔昭和31〕年12月までに内部施設工事を完了した。これに伴い、本学院は、衣・食・住全般にわたる総合教育を行うようになった。

また、拡充・発展に伴い、1957〔昭和32〕年2月には、法人名を「準学校法人浅井学園」（学園長・浅井淑子、理事長・浅井猛）に変更し、「北海道クッキング・カレッジ」（4か月速成科）を併設した。（このクッキング・カレッジは、9年後の1966〔昭和41〕年3月に、志願者減

のため廃止した）

1959〔昭和34〕年4月には、経営権の移譲によって、1949〔昭和24〕年4月から教育面の担当を依託されていた「北海道ドレスメーカー女学院旭川分院」を正式に「北海道ドレスメーカー女学院」の旭川分院とした。分院は、1960〔昭和35〕年4月に、旭川市5条11丁目の元旭川市立図書館の校地・校舎を購入し移転した。現在の旭川調理師専門学校の所在地である。

3. 1960〔昭和35〕年以降の時期

本学院は、1963〔昭和38〕年1月に、短期大学の新設を前提に、法人名を「準学校法人浅井学園」から「学校法人浅井学園」へと変更した。これは、私立学校法の規定によって、準学校法人のままでは、短期大学の設置ができないからである。そして、1963〔昭和38〕年4月、学園の新しい飛躍の形として、姉妹校「北海道女子短期大学（現・北海道浅井学園大学短期大学部）」が創立された。今日の「学校法人浅井学園」の基礎は、この時期に確固たるものとなったのである。

このころの統計資料をあげてみると、本学院の隆盛ぶりを知ることができる。札幌の本院に限るが、1962〔昭和37〕年4月には、在学生総数は901人（昼間部；本科395人・師範科275人・高等師範科98人、夜間部；本科93人・補習科34人・師範科6人）で、専任教員は32人であった。また、1963〔昭和38〕年4月には、在学生総数は844人（昼間部；本科355人・師範科292人・高等師範科80人、夜間部；本科76人・補習科33人・師範科8人）で、専任教員は33人であった。さらに、1964〔昭和39〕年4月には、在学生総数は870人（昼間部；本科345人・師範科260人・高等師範科100人、夜間部；本科109人・補習科42人・師範科14人）で、専任教員は33人であった。旭川分院でも同様で、多数の学生が入学した。

しかし、相次ぐ短大の創設・学科増や、受験生の短大志向、18歳人口の減少などの影響を受けて、入学者減に転じた。1968〔昭和43〕年をピークに、各種学校全体としても、学生数の減少期に入っていくことになる。

本学院は、1971〔昭和46〕年4月に、本科・師範科・高等師範科に加えて、「服飾専攻科」を新設した。

ここで付加的な説明を一つ行う。1971〔昭和46〕年11月、学校法人浅井学園は、新しい学園の発展の形として、姉妹学園「学校法人北海道浅井学園」を設立した。後述の「旭川調理専門学校」及び「大麻幼稚園」を創立するためである。新しく別の法人を設けたのは、これらの学校の設立にあたり、既設の設置校を含めた書類づくりが極めて煩雑であることがわかり、事務的な煩雑さを避けるための処置であった。「学校法人北海道浅井学園」については、この程度の説明にとどめる。

1975〔昭和50〕年4月には、「プロフェッション科」を新設し、高等師範科を「デザイナー科」と変更した。これによって、学科構成は、昼間部は、プロフェッション科・本科・師範科・デザイナー科・服飾専攻科となり、夜間部は本科・補習科・師範科となった。

そして、1975〔昭和50〕年8月からは、学校名の中の「女」を外し、「北海道ドレスメーカー学院」と変更し、名実ともに男女共学となった。既に1956〔昭和31〕年4月から男子の希望者も入学させてきたのであるが、年々増加するのを受けて、男女共学のものであることを明示したのである。

学校教育法の改正によって、1976〔昭和51〕年4月、本学院は、各種学校から、服飾専門課程の「専門学校」（高校卒業者を対象とする専門課程を置く専修学校・家政分野）に昇格した。

4. 1980〔昭和55〕年以降の時期

1980〔昭和55〕年1月4日、創立者（初代学院長・初代学園長）である浅井淑子の逝去に伴い、同年2月、第二代学院長に、当時学院長代行をしていた私が就任した。新学院長のもとで、学科編成の刷新が検討され、服飾産業界の多様化・専門化に対応する専門コース別に改編し、より一層集中的に目的別教育を行うことになった。「オートクチュール（本科・師範科・デザイナー科）・アパレル産業（プロフェッション科）・コーディネーター」の3コース制にした。

志願者の減少が著しくなったため、1981〔昭和56〕年3月には、創立以来42年間続いた夜間部を廃止した。また、1989〔平成元年〕年3月には、創立以来50年間続けられてきた寄宿舎を廃止した。さらに、1949〔昭和24〕年9月から43年間続いた「北海道ドレスメーカー学院旭川分院」も、時代によって求められた任務を終え、休校措置を経て、1992〔平成4〕年4月から札幌の本院に吸収合併となった。

社会の要請に応えるために、1993〔平成5〕年4月には、設置学科を大幅に改編し、2年課程のオートクチュール科・アパレル科・コーディネーター科と1年課程のデザイナー専攻科の3学科1専攻制とした。

学校教育法の改正に基づき、1994〔平成6〕年文部省告示第84号によって、1995〔平成7〕年1月1日から、一定の要件を満たす専門学校の卒業者に「専門士」の称号を付与できることになったのに伴い、その要件を満たす本学院は、同年3月の卒業生から、服飾・家政専門課程の「専門士」の称号を付与することになった。

創立61年目の北海道ドレスメーカー学院は、2000〔平成12〕年4月現在、上記と同じ学科編成で、2年課程のオートクチュール科（入学定員80人）・アパレル科（同40

人）・コーディネーター科（同80人）に加えて、1年課程のデザイナー専攻科（同60人）を設置している。全学生数は379人で、教員数は19人である。1939〔昭和14〕年創立以降の卒業生総数は、旭川分院を含めて、実数で35,460人に達する。

5. 2001〔平成13〕年以降の時期

浅井学園について、21世紀に向けての思いを述べて、この章の締めくくりとしたい。

創立61年の歴史を有する浅井学園は今日、姉妹学園・北海道浅井学園を含めて、2大学・2専門学校・2幼稚園を擁するまでに飛躍的に発展した。設置学校は、設立順にあげると、①北海道ドレスメーカー学院（旧・北海道ドレスメーカー女学園→北海道ドレスメーカー女学院、1939〔昭和14〕年9月開校）、②北海道浅井学園大学短期大学部（旧・北海道女子短期大学、1963〔昭和38〕年4月開学）、③大麻幼稚園（1972〔昭和47〕年4月開園）、④旭川調理師専門学校（旧・旭川調理専門学校、1972〔昭和47〕年4月開校）、⑤第2大麻幼稚園（1974〔昭和49〕年4月開園）、⑥北海道浅井学園大学（旧・北海道女子大学、1997〔平成9〕年4月開学）である。

今は亡き父・浅井猛（初代理事長・1991〔平成3〕年1月11日逝去、71歳）は、いち早く大学設立の構想をもっていたが、その時は熟することなく、息子に理事長職などすべてのバトンを託し、無念な思いで急逝した。第二代理事長になった兄・浅井幹夫（現在、二つの大学の学長も兼任）の先見性は、父に負けず劣らずであり、時代のニーズを的確にとらえ、社会の要請に着実に応えている。理事長就任後、わずか8年にして念願の大学の設立を実現。そして、この2000〔平成12〕年4月からは、大学に「人間福祉学部」に続いて、短大からの改組転換によって全国初の「生涯学習システム学部」を開設した。北海道ドレスメーカー学院に続いて、大学も「女子教育」の門戸を男性に開放し、男女共学制を導入した。このために、「北海道女子大学」の名称を「北海道浅井学園大学」に変更した。浅井学園グループ校全体で愛唱する学園歌も、北海道出身のヒットメーカー・彩木雅夫先生さいきまさおの作曲で制作し（作詩は兄と私が担当。編曲は若草恵氏）、「かがやきの・青春—浅井学園イメージソング—」として2000〔平成12〕年4月の入学式で発表した。次々と行われる変革に的確に対応するスタッフの方々の並々ならぬ努力に、深く感謝している。

厳しい試練の少子化時代を迎えて、私学の抱える課題は山積みではあるが、内部体制をしっかりと固め、整理しながら次へのステップとしていかななくてはならないと思う。特に21世紀は、文明の利器がますます進歩し、情報化社会が発展するので、精神文化を見失わないように、

バランスのとれた人づくりをしなければならない。教育の原点、教育の真髄を更に深く掘り下げ、ますます難しくなる人間関係の在り方を見直し、高い理想と夢に向かって、選ばれた多くの優秀なスタッフとともに歩み続けなくてはならない。

幸いにして、亡き創立者・先輩が私たちに残してくれた財産は沢山ある。なかでも貴重なものは、素晴らしい「人脈」と厚い「信用・信頼」である。しかし、これを生かして、与えられたステージでどのように舞うかは、これからであり、私たち次第である。いずれにせよ、大学の創立に当たり浅井学園の顧問としてお迎えできた一番々瀬先生をはじめとする多くの先生方の努力に感謝し、そして先駆者・先輩・卒業生たちの足跡に感謝しながら、浅井学園は今後も、着実に確実に、そして誠実に歩み続けなければならない。

思いが多すぎて、適切な言葉で表現するのは難しいが、私たちに課せられた課題は、「生きた学園」「生かされた学園」を一層高いものに築きあげること、そしてそれをしっかりと三代目にバトンを渡すことであろう。多くの人々の知恵と努力で、脈々と受け継がれてきた浅井学園の精神を着実に次代へ継承し、「不滅な学園」として歩み続けることが出来るように願ってやまない。

Ⅳ 今後の専門学校の在り方—私見—

話題は大きくかわるが、最近の専門学校（専門課程を置く専修学校）の変革・発展について触れ、今後の在り方についても私見を述べておきたい。

1. 最近の専門学校の変革

専門学校における最近の大きな変革の一つは、「専門士称号の付与」である。

大学卒業者には学士の学位、短期大学卒業者には準学士の称号が与えられるが、これまで専門学校の卒業者に称号の付与という制度はなかった。実践的な職業教育、専門的な技術者教育を学ぼうとする専門学校は称号よりも資格や実力を“拠り所”としていたからである。だが、国民総生涯学習化の時代を迎えて、実力評価のほかにも一つ、学習成果の評価を正当に評価する「物差し」があってもよいのではないかという議論が高まり、新しく制度化されたのが「専門士」である。

「専門士」の制度化により、専門学校における学習の成果が社会で適切に評価され、またその修了者の社会的地位の向上も図られるものと期待されるが、一方で、専門学校には「専門士」の称号に相応しい教育内容の高度化が課せられたことになる。「①修業年限が2年以上、②課程の修了に必要な総授業時数が1700時間以上、③試

験等により成績評価を行い、その評価に基づいて課程修了の認定を行う」との要件を満たした専門学校の卒業者に、1995〔平成7〕年1月1日から「専門士」の称号が付与されることになった。

もう一つは、「大学への編入制度の導入」である。専門士の称号付与が実現して2年を経過した1997〔平成9〕年8月、文部省は「教育改革プログラム」を発表した。この中で、専門学校修了者の大学への編入学について、大学審議会で速やかに結論を出すよう促した。審議会は同年12月、一定の要件を満たした専門学校の修了者に大学等への編入学を認める提言を盛り込んだ答申を文部大臣に提出した。これを受けて政府は、1998〔平成10〕年3月の閣議で、専門学校修了者の大学編入学などを規定した『学校教育法等の一部を改正する法律案』を決定し、国会に提出し、可決・成立した。これは、「専門士」の称号付与に関する規定が文部大臣告示により定められ、その内容が短大と横並びであったことから、「専門士」の称号が付与される専門学校の修了者は、大学編入学を認めて当然とする、専門学校関係者の強い要望を受け入れたものである。

学校教育法の第82条校と第1条校の“連結”は、今という教育のビッグバンの始まりといっても過言ではなく、生涯学習の観点からも画期的なシステムといえる。当然、第1条校の短大や大学関係者から反対の声が上がったことはいうまでもない。しかし、教育改革の波は、専門学校と大学に強固なパイプを敷き、高等教育の望ましい生涯学習社会への移行に一石を投じることになった。

2. 専門学校の役割と課題

専門学校は、社会の変化に対応した実践的な職業教育・専門技術教育等を行う教育機関として、1976〔昭和51〕年の制度改正以来、着実に進展してきた。特に、高等学校卒業者を入学対象とする専修学校専門課程は「専門学校」と称し、生徒数も1998〔平成10〕年5月現在約63万人に及び、量的にもわが国の高等教育に重要な一翼を担うとともに、多様な社会の要請と国民の教育ニーズに応え、高等教育の多様化・個性化を図るうえでも重要な役割を果たした。時代の要請に応え、今後も更に必要とされる技術教育が行われ、各分野のスペシャリスト養成の役割を大きく担うことになるだろう。

しかしながら、専門学校を取り巻く環境は、急速な環境の変化や技術革新の進展、18歳人口の激減など、大きく変化している。このような中で、専門学校は、その自由で弾力的な制度の特色を生かし、複雑化する社会のニーズにさらに的確に対応し、同時に生涯学習の要素を充分に含んだリカレント教育を見直し、新しい教育内容

を一層充実させ、設備・整備の充実も図っていかなくてはならない。しかし、「人間死ぬまで勉強」の生涯学習システムは、本来の専門学校の姿として構築されつつある。例えば、本学院の姉妹校「北海道浅井学園・旭川調理師専門学校」の2000〔平成12〕年度の入学生の動向をみても、まさしくそこには生涯学習がある。62名（定員60名）のうち、32名が高校卒業者、30名が社会人入学者である。老若男女、年齢を問わずそこに集うものの「志」は同じで、本来の専門学校の教育の姿が充分に果たされていると言っても過言ではなからう。

本来、人間は「知育・体育・徳育」で形成されるが、「知」が先行されてきた日本では、勉強（学習部門—国語・算数・社会・理科・英語—）が出来るものが優秀で、「体」の五感感性（芸術部門—音楽・体育・家庭・書道・美術—）の完成度の高さをあまり認めず、一時「体」の得意な子を「おちこぼれ」とまで名づけ、社会のはみ出しものにし、わざわざ「不良」を輩出した。日本教育の間違ひは、「知」と「体」のバランスを崩したことで、役割の認識がなされていなかったことである。諸外国では、大学・短大は、学問の追究及び「知」の追究で、インテリジェンス、エリートといい、専門学校は、技術の追究及び「体」の追究で、スペシャリスト、オビニオンリーダー—という、私は解釈している。どっちがどう？ではなく、役割の違いだけである。しかし、現在は共存共栄しつつあり、大学卒業者が専門学校へ進学・編入する例も珍しくはなくなった。今は、偏見や違和感もなく、当たり前にお互いを認め合えるようになった。これが「本来の姿」である。

また、私はもう一つ、そもそも日本の教育体制にいつも大きな疑問を感じている。それは、いかなる時も縦割り機構、横並び教育であること。「6・3・3制度」で、年齢別の方法をよしとしていることである。その点諸外国から学ぶことは多い。その人の能力・個性、ある時は熟成度で正しい評価をし、その人自身にプログラムされた教育が、そこにはある。決して画一化されたものではなく、その人に合わせた「無理なく、焦らずの教育」である。

例えば、小学校1年生が大学へ行ったり、逆にクリアしなくてはならない学年に力が満たない者には時間をかけ、ある学年を何度でもやり、その時期を待つ。そしてそれは、恥ずかしいことではなく、むしろ正しく評価され、もっと優れたその人自身の個性・持ち味を重んじ、別な形で評価してあげる。そんな行為を、日本人は「差別」と偏見の目で見ると。「差別」と「区別」の認識が実に低い。最近では、日本も「個性重視」と言い、抜本的見直しが必要とされているものの、気づくのが遅く、いつも形から入るので「後手発想」である。

「今後の教育の在り方？」「本来の教育とは？」ということを経験に立つ者はしっかり分析し、見直しをかける必要がある。次代を担う可能性をいっぱい秘めた子供たちを正しく導く「義務と責任」を感じる。それ以前に、何事にも「役割」と「使命」があることを認識したいものである。少なからず大人といえる私たちは、子供たちを潰してはいけぬ。そのためには、毅然と前を歩き、良いお手本になるような努力が必要ではないか。「教師は学生や生徒の鏡」「親は我が子の鏡」「大人は子供の鏡」。いつの時も「先人・先輩の後ろ姿を見て、歩み、育つ」ことを、しっかりと確認し、「愛と勇気」をもって前を歩きたいものである。

3. 教育内容の個性化・高度化

1994〔平成6〕年6月の専修学校設置基準の改正では、専門学校が多様な教育ニーズに一層適切に対応できるよう、専門課程の授業科目に関する制限を廃止し、ほかの専門学校や大学・短大における授業科目の履修の単位認定、教員資格の弾力化などの制度改革を行った。

同時に、特色ある教育の見直しが必要になった。私学には、創立者が掲げた建学の精神、教育理念、日々の生活における行動規範となる校訓等がある。創立当時から流れている思想・考え方が、どんな時代がこよともより正しく伝承され、常に新しい時代を見据えて教育内容・カリキュラムを是正し、時代に即応した人材育成が必要である。しかし、とすると、専門学校によっては「看板に偽りあり」「過大広告」による学生数確保が優先し、内容が伴わないものもあり大変迷惑をこうむることも少なくない。これは、見逃せない問題である。専門学校は、その点における検証機関が曖昧であるといっても過言ではない。

4. 学習成果の適切な評価

専門学校における学習の成果については、専門士制度の創設のほか、専門教育等の一部改正により1999〔平成11〕年度から、一定の要件を満たす専門学校卒業者の大学への編入学が認められることとなったが、さらに専門学校卒業生の企業等などでの処遇や、各種国家資格の受験の際の取り扱いについては、短期大学卒業に相当する取り扱いを受ける例も増え、今後一層見直されるだろう。日本の大学入学制度は、入学は多少難しいが、卒業はトコロテン式に押し出す。諸外国での卒業資格取得は想像以上に厳しく、その分、評価も高い。日本におけるライセンス取得も、国家試験レベルのものは高く評価されるが、それ以外はほとんど価値が見いだされない。それは、容易な取得方法に問題があり、権威づけが必要に思えてならない。今後日本は、さらに終身雇用制度もなくなり、

まさしく実力社会となるうえでも、この価値判断・基準のとらえ方の是正が求められる。就職においても、資格が認知され、持っているライセンスの内容、実力・実績の評価のもとに給料体系が見直され、それらが正しくなされれば、努力レベルも上がり、真の自己成功体験のうえにさらに自分を見つめ、自分自身を構築する機会にもなる。「あなたは何か出来ますか？ あなたのキーワードは？」ということが、ますます問われるであろう。「即戦力」と同時に、「企業は人なり」が追求されるだろう。

V 北海道発信のものの見方・考え方

— 北海道の今後に期待するもの —

冒頭に述べたように、一番ヶ瀬先生に触発されて、北海道発のものの見方・考え方について、私なりに2、3の見解をまとめてみたい。私の、故郷「北海道」への思い入れは、母譲りのものであると言ってよいであろう。私は「道産子^{どさんこ}」である。母が持ち続けた思いと願いの一つは、「『文化』の発信は北海道から」であった。講演会などで熱っぽく語る母の姿を垣間見て育った私は、いつしかこの面でも母の継承者になっていたのである。

以下に述べるのは、北海道に寄せる私の思いの一端である。生意気な言い方、過激な言い方になっていたら、母への思い、熱意が言わせていると理解していただき、お許しを願いたい。

1. 今、北海道は何が問題か

1999年の北海道イメージキャンペーン「試される大地『北海道』」は、次のように綴られている。

一步踏み込む勇気があれば、
きっと何かがはじまる。
人びとの夢を育み、
心をいやし続けてきた大地、
北海道、
一人ひとりの英知が試される時代、
今だから、
北海道だから、
できることがあります。
北の大地は、
その舞台になりたいと思います。

蝦夷地と呼ばれていた原始の森林に開拓使が置かれ、11国86群を持って「北海道」と改称されてから130年が経過した。この原始のままの大地が驚異的な速さで開拓され、今日のような文化水準の高い北海道が創造されたことは、世界を見渡しても類を見ない快挙である。北海

道を生活の基盤にする私どもは、この先人の苦勞に心底から敬意を表し感謝しなければならない。しかし「文化」先行だけでは、事は始まらない。北海道をどう活性化するか、言い換えれば、「北海道自立・独立」に向けての戦略的探求が必要である。

近年、北海道の地位はますます低下し、厳しい状況に追いやられている。特に、金融業界のトラブル（拓銀の破綻）を境に、バブル期に一時は潤ったものの、バブル崩壊後は、経済成長率、一人当たりの道民所得、民間施設投資の伸び率など、どの経済指標を見ても、本州のそれとの格差は開く一方である。こうした中であって、一部の指導者の危機感は異常な高まりをみせてはいるが、一般道民の意識の低さは、まだまだと言ってよい。私は、「これでいいのか、北海道」と言って、いつもゆさぶっている。最近では、もう人に任せてはおられず、自分の立場を通して事あるごとに言い続けている。あらゆる機会（学生指導、外部からの依頼仕事、講演等の仕事）に、「依存主義的北海道人の在り方」について述べている。北海道人気質のおおらかさ、心の豊かさは、失いたくないものであるが、この地には、まだまだ人間らしさが残っている。新千歳空港に降りたときに、誰もが、いつでも感ずるこの自然の雄大さとともに、本州にはない北海道特有の“美質”といってよいものがある。しかし、それらの素晴らしさを生かし切っていないのが現実である。21世紀の北海道に対し、道民は、何よりもゆとりある生活と美しい自然の保持を求めているが、それと同時に、「自分の身は自分で守る」という気持ちも持つべきである。日本においては、北海道は北に位置する離島の一つである。よく名づけたものである。「本州」と。北海道は、「別州」なのか、「諸州」なのか。「厄介道（やっかいどう）」という説もある。ゆとりある生活や美しい自然の保持も、北海道経済の活性化を欠いては不可能だということをもっと真剣に考え、「今」から備えておくべきである。その経済活性化に陰りが見え、深刻さの度合いを深めている点にこそ、今日の北海道問題のポイントがあると言ってよい。

明治以来、中央政府による開拓の歴史を持つ北海道は、沖縄と並んで今日まで、国内で最も公共投資に大きく依存した経済を営んできた。それに慣れてきた惰性はこわい。公共投資依存、中央政府依存を続けるうちに、道民は、いつの間にか「親方日の丸」意識にどっぷりと漬かって、自立心を薄めてしまったのではないかと思われる。ふと身震いすることがある。神戸の地震がもし東京で起こっていたら、日本のすべての機能は麻痺し、一番最後に配給？ 視野？ に入れられるのが北海道、というのがおちである。

2. いま、開拓精神をどう生かすか

北海道再生のカギは「親方日の丸意識」からの脱出であり、今こそ道民が本来持っている「フロンティアスピリット（開拓精神）」を発揮する時である。中央政府も不要とする意気込みさえあれば、前途は決して暗くないはずである。次に、その具体的提案をいくつか述べてみたい。

① モードタウン北海道・ウインターモードの発信と宣言……例えば、新人デザイナー育成コンペの開催、冬のモード研究所等の設立、北海道「衣文化」の博物館・歴史館の建設など。ファッションタウンさっぽろと、モード作りはしているものの、研究機関がないので、素材研究等においては力不足である。北海道の中でも、北と南とでは温度差がある。特に、厳冬の稚内辺りでその厳しさを考えてみたい。文化は必要に駆られて出来るもので、札幌のように人口密度が高く、地下街やロードヒーティングのある所からの発信は難しい。

② 二次産業の強化……例えば、アトリエの誘致、生産工場の誘致など。北海道の豊かな自然から産出する価値ある産物（一次産業）があるのに、それらを正しく生かしていない。デザイン能力を含めて、生産力に欠ける二次産業への取り組みがなされていない。例えば、コンブ、しゃけは捕れるが、加工は本州で行う。道民は、三次産業で市場に出回った物を買う。「宝の持ち腐れ」の何ものでもない。新鮮な「たらこ」がいつしか「めんたいこ」になる。実に不思議である。

③ 北海道の独自性をキーワードとしての宣言……例えば、世界に誇れる観光都市宣言、おしゃれな人々が行き交う「一期一会」の北海道など。宣言のあとには、ブームづくりをしてシステム化させる。そして、道民の意識改革の徹底、参加意識の向上が必要である。観光・ビジネス等のリピート客を増大させなければならない。

④ 人に優しい環境の整備……例えば、ゴミ一つないクリーン北海道、ルールを守られる安全地帯北海道、第二の「ふるさと」心の北海道など。明るくきれいな所に、環境に人に優しい所に、人は集まる。そして、「一度行ったらもういい」ではなく、「また行きたい」となり、「次の機会には人を連れて行きたい」と。人が人を呼び、「掛け算方式」である。「休まる、安心、ステキ、おしゃれ」の「美学」をモットーとし、イメージアップからの活性化、産業の推進を図る。

⑤ 大自然を生かした教育・育成……例えば、国の宝は「子供・人」、地場産業の育成・助成など。教育と言っても、人材育成に限らない。地域・地場の育成、ベンチャー企業への融資・助成を徹底して行う。軌道に乗るまでは、アドバイスなどの協力体制を徹底する。そして、

成功者をもっともっと育てるべきだ。足の引っ張り合いはもうよい。認め合える大人社会にしたい。また、北海道での「国会」の開催（第二会場とか）など、大自然の空気の良いこの地で、国策「今後の日本をどうするか」を考えるステージにする。東京の国会議事堂は、肩幅程度の窮屈なデスクが並ぶ、窓一つない密室。知識人と言える人たちなのに、追い詰められてゆとりがない。疲れた頭で「日本」を考えても、「下手な考え休むに似たり」。むしろかわいそう。夏は涼しい素晴らしいこの大自然の北海道で、冬は暖かい九州で、「日本を、世界を、宇宙を、語ってみては」。屋外をもっと利用して、各党ごとにもんで、もんで中央で意見の集約をする。国会議員の数も多すぎる。

⑥ 北海道の大自然の豊かさを生かしたあそび心……例えば、「雪」の活用、「大自然の産物」おもしろ利用、北海道まるごとディズニーワールド・テーマパークなど。「四季」がはっきりしている地域は、日本では北海道しかない。そのシーズンを逃さず、生かす。雪の活用も雪祭りだけで終わらさず、子供たちに遊びと夢を与えたい。中身のないテーマパークは、もういい。

3. 真の自立・独立に向けて

今、北海道に必要なものは何か。それは、産業クラスター方式や魅力の都市・北海道づくり、イメージづくり、マインドコントロールをしながらの意識啓発などである。また、挑戦するニューリーダーを立て、企業家精神に富む若い中小企業家たちの本音と行動を取り上げ、本来の姿と中央政府や道庁主導の“上からの活性化”論の抜本的見直しをして、下からの活性化を具体化させることである。北海道の将来を担うのは、「産・学・官」の三位一体。企業家精神に富んだ、次代を担う若き実業家が主導権を持っていかなければならない。

北海道のステージは、そんな密なつながりが出来ない地域ではないはず。もし問題があるとすれば、距離感をどう埋めるかである。そして一番大切なことは、道民の意識改革である。「誰かが何かをやってくれるだろう」ではなく、「本当に必要な事である」という認識のもとに、まず足元から、各々の立場で、出来る事から行うことが大切である。ただ、今は気持ちに負けている。そして動くことを恐れている。これだけ報道の自由が優先されている時代だから仕方ないことではあるが。そして、報道の誇張が気になる。もっと責任・節度ある行動を、と言いたい。何でも本当だけが正しいとは思わない。寝ている子を起こす事にもなりかねない報道には、時には腹立たしい思いがする昨今である。

いずれにしても、考えが変われば行動が変わる。備えあれば憂いなし。事が起きてからでは遅い。大地にしっ

かり足を踏みしめ自力で歩む。「大人としての北海道人よ、『真の自立・独立』を目指して、今こそ立ち上がり、踏み込む勇気を持つてはいないか」と叫びたい。前掲の1999年の北海道イメージキャンペーン「試される大地『北海道』」の言葉を読み返してほしい。

VI おわりに

最後に一言、今後の心構えを述べて、結びとする。

山あり谷あり、波瀾万丈であろうが、北海道の教育界の担い手として、また、リーダー的存在としての浅井学園に対する期待は想像を越えるものがある。「北海道を創る」ということは、地域への貢献に限らず、優秀な人材を送り出す重要な舞台だからである。「ローマは一日にしてならず」の格言のごとく、努力あるのみである。しかし、私どもが一生懸命努力しても、評価を下すのは世間である。時代のニーズに即応していかなければ、おのずと淘汰される。具体的行動パターンを間違わないように、「心一つ」にして研鑽あるのみである。

創立者の母・淑子に関する記録としては、①校訓「明るく、正しく、らしく」の由来のこと、②様々な分野の人々から「ママ先生」と呼ばれ、慕われていたこと、③「鋼鉄のような強い意志の持ち主」と言われていたこと、④

「女傑」と思われていたこと、⑤少しでも時間があれば手紙を書いていたこと、⑥なによりもバラの花が好きだったこと、⑦彼女がもし「やり残したことがあるとしたら？」等々、書き残しておかなければならないことが数多くある。しかし、本稿では、これらについてまったく触れていない。

母の二人三脚のパートナーとして、学園の初代理事長として、重要な役割を果たしてきた父・猛の生涯についても、本稿では、あまり触れていない。

これらについては、二代目継承者の課題と受け止め、機会をみて調査し、ぜひ書き残しておきたい、と思っている。

(付記)

本稿は、前・北方圏生活福祉研究所長（現・北海道浅井学園大学副学長兼同短期大学部副学長）・白佐俊憲先生の熱心なお勧めに応じて執筆したものです。草稿を読んで、「史料価値の高い内容にするために」と、何度もご助言や激励をして下さいました。そして、ご多用の中、年譜の作成と拙稿の校閲の労もっていただきました。また、資料の収集・確認のために、多くの方々の手を煩わせました。これらのご協力・ご支援に対し、深く感謝申し上げます。（2000・5・31）

Advancement of Asai Gakuen and Its Founder's Footmarks

Yoko Asai President Hokkaido Dress Maker College

Abstract

In order to explore the essence of the educational initiatives led by Mrs. Yoshiko Asai, founder of the Asai Gakuen Educational Foundation, the writer traces the founder's personal history from her birth until her passing, identifies her interactions with those around her, and outlines the development of Hokkaido Dress Maker College. Taking a fresh look into the historical facts, the writer examines how the institution's "founding spirit" and "philosophy of education" were created. She also adds newly discovered information to the existing chronological record of the founder's career, thus making it more concrete and specific.

The writer goes on to consider how professional schools should develop in the future and to discuss what a Hokkaido-oriented way of thinking should be.

Key words : Asai Gakuen (Educational Foundation), Yoshiko Asai, Takeshi Asai, Mikio Asai, Yoko Asai, Dress Making College, Hokkaido Dress Making College, Hokkaido Dress Maker College, miscellaneous schools (kakushu gakko), professional schools (senmon gakko), Hokkaido-oriented ways of thinking

浅井学園創立者・浅井淑子先生の主要年譜

注：行頭の数字は、年月日又は年月。年・月・日の順で、大正・平成の付かないものはすべて「昭和」。「○～○」とあるのは期間を示す。項目説明の最初に「○歳時」とあるのは、浅井淑子先生の年齢を意味する。敬称は省略した。その他、記述のない部分は「不明」を意味する。（平成12年5月30日現在判明分、白佐俊憲作成）

主要家族歴・病歴等

- 大正6・7・4 父・渡邊政助、母・ワカの長女（7人きょうだいの第2子）として、札幌市南1条西5丁目1番地において出生。（兄・博：大正5年8月6日出生、0歳で死亡）
- 大正12・7・18 6歳時。妹・道子、1歳で死亡。（道子：大正11年3月20日出生）
- 大正14・3・30 7歳時。妹・敏子、1歳で死亡。（敏子：大正13年1月15日出生）
- 19・8・10 27歳時。治部信夫と結婚。（治部信夫：大正2年4月1日出生）
- 20・5・10 27歳時。長女・俱仁子出生。（注：戸籍上の記載に従い、下記の「洋子」も長女とする）
- 20・5・18 27歳時。長女・俱仁子、0歳で死亡。
- 20・6・17 27歳時。夫・治部信夫、32歳で死亡。（沖縄本島島尻郡で戦死）
- 21・6・1 28歳時。妹・眞佐子、17歳で死亡。（眞佐子：昭和3年7月26日出生）
- 21・6・22 28歳時。弟・純男、19歳で死亡。（純男：昭和2年2月28日出生）
- 21・12・24 29歳時。神父・浅井正三氏からカトリックの洗礼を受ける。洗礼名は「アナスタジア」。
- 23・4・15 30歳時。浅井猛と再婚。（浅井猛：初代の浅井学園理事長・北海道浅井学園理事長。大正9年1月8日出生。平成3年1月11日、71歳で死亡）
- 23・9・18 31歳時。長男・幹夫出生。（幹夫：現在、浅井学園理事長・北海道浅井学園理事長・北海道浅井学園大学学長・北海道浅井学園大学短期大学部学長）
- 25・2・24 32歳時。長女・洋子出生。（洋子：現在、浅井学園理事・北海道浅井学園理事・北海道ドレスメーカー学院学院長）
- 36・6・19 43歳時。母・ワカ、68歳で死亡。（ワカ：明治26年5月2日出生）
- 39・2・2 46歳時。雪道で転倒・右足首捻挫・脱臼。入院治療を行わなかったために、3月末から7月まで自宅勤務を強いられるほど悪化させてしまう。7月からは入院。
- 39・7～40・5 47歳時。バージャー病（ビュルガー病、ビルゲル氏病などともいう）のため朝里温泉整形外科病院（小樽市）に入院。
- 39・7・19 47歳時。父・政助、78歳で死亡。（政助：明治19年2月26日出生）
- 40・6 47歳時。東京慈恵会医科大学付属病院に検査入院。
- 40・6～41・12 47歳～49歳時。札幌医科大学付属病院において入院・退院を繰り返す。
- 50・8・5 58歳時。弟・勇二、54歳で死亡。（勇二：大正10年1月2日出生）
- 54・2～54・8 61～62歳時。バージャー病と心臓喘息のため札幌医大附属病院に入院。
- 55・1・4 62歳時。本人死亡。（旅行先の大阪で急性心筋梗塞のため）

学歴

- 大正13・4 6歳時。札幌師範学校附属小学校入学。（現・北海道教育大学附属小学校の前身）
- 5・3 12歳時。札幌師範学校附属小学校卒業。
- 5・4 12歳時。小樽緑丘高等女学校入学。（現・札幌山の手高等学校の前身）
- 6・4 13歳時。東京国華高等女学校の2年生に編入学。（現在の東京都荒川区に所在。昭和33年3月廃校）
- 9・3 16歳時。東京国華高等女学校卒業。東京女子医専を受験・合格したが、父に反対され入学を断念。
- 11・9 19歳時。東京に出て、ドレスメーカー女学院速成科入学。（私立・杉野学園。東京都品川区に現在も所在。学修期間：速成科4か月）
- 11・12 19歳時。ドレスメーカー女学院速成科卒業。
- 12・6 19歳時。ドレスメーカー女学院研究科入学。（同上。学修期間：研究科1年・師範科1年）

- 14・5 21歳時。ドレスメーカー女学院師範科卒業。札幌市の自宅に帰る。
- 25・10 33歳時。北海ドレスメーカー女学院の学院長在職のまま、ドレスメーカー女学院デザイナー養成科に入学。(同上。学修期間6か月)
- 26・3 33歳時。ドレスメーカー女学院デザイナー養成科卒業。

主要職歴(学校経営歴等を含む)

- 14・9～15・6 「北海ドレスメーカー女学園」を札幌市南1条西5丁目において創立。園長に就任。
- 15・6～55・1 各種学校の認可を北海道庁長官から受け、校名を「北海ドレスメーカー女学院」へ変更。学院長に就任。以後、4回校名を変更。16年12月「北海洋裁専門女学院」へ、20年12月再度「北海ドレスメーカー女学院」へ、26年6月「北海道ドレスメーカー女学院」へ、50年8月「北海道ドレスメーカー学院」へ変更。男女共学となる。51年4月から、服飾専門課程の専門学校に昇格。学院長職は、浅井淑子死亡のため55年2月から浅井洋子が就任(現在に至る)。
- 24・10～55・1 旭川市所在の北海道ミシン株式会社から、同社経営の「北海ドレスメーカー」の教育面の担当を依頼され、校名を「北海ドレスメーカー女学院旭川分院」(所在:旭川市4条9丁目)へ変更し、経営傘下に加える。34年4月経営権移譲によって、正式に「北海道ドレスメーカー女学院」の分院となる。35年4月の移転(旭川市5条11丁目)、50年8月の校名変更を経て、平成4年4月に札幌市にある本院に吸収合併。(分院長は、24年10月から老久保小夜子、32年4月から村松美津江、34年4月から再び老久保小夜子、50年4月から吸収合併まで加藤玲子)
- 26・6～55・1 私立学校法に基づき、「準学校法人北海道ドレスメーカー女学院」を創立し、理事に就任。以後、2回法人名を変更。32年2月「準学校法人浅井学園」(学園長に就任)へ、38年1月「学校法人浅井学園」へ変更。理事職は、浅井淑子死亡のため55年2月から浅井洋子が就任(現在に至る)。
- 35・4～37・3 市立の名寄女子短期大学(現・名寄短期大学)助教授に就任。「被服構成及び実習」・「デザイン」・「被服材料」・「手芸」を担当した。健康上の理由で退任し、非常勤講師となる。
- 37・4～38・3 名寄女子短期大学非常勤講師に就任。「デザイン」を担当した。短期大学の創設など、校務多忙のため、非常勤講師も1年で退任した。
- 38・4～55・1 学校法人浅井学園に「北海道女子短期大学」を創設、教授に就任。38年4月～40年3月は被服科長、40年4月～45年3月は服飾美術科長を務めた。38年4月～43年3月は学生部長も兼務した。教科目は、最初は「被服概論」・「デザイン」を担当したが、41年4月からは「服装原論」・「服飾デザイン」などを担当した。また、42年4月から開設した専攻科服飾美術専攻では、当初「服飾美学」を担当し、その後長く「服飾デザイン」を担当した。
- 46・11～55・1 「学校法人北海道浅井学園」を設立、学園長・理事に就任。47年4月「大麻幼稚園」を開園、47年4月「旭川調理専門学校」を開校、49年4月「第2大麻幼稚園」を開園。55年1月、死亡のため学園長・理事降職。

海外研修

- 28・10・1～29・6・8 マリー・フランス誌のザビヌ・ベリッツ女史の招聘によって、フランスを本拠としてヨーロッパ11か国にわたり、専門分野の服飾と食・住に及ぶ研究。また、家庭生活の実情等を視察。パリ・オートクチュールにおいて研修(北欧三国を含む)。北海タイムス(社)の特派員記者としてビザを取得。
- 44・7～44・8 学園創立30周年を記念して、ヨーロッパ視察団を結成、ヨーロッパ6か国の視察。
- 49・7～49・8 ヨーロッパ5か国を視察。パリ・オートクチュールにおいて研修。
- 50・7～50・8 ワシントンD・C、ニューヨーク等アメリカ5州を視察。
- 51・7～51・8 アメリカ西海岸各州を視察。
- 52・2～52・3 北方圏調査会・毎日新聞社主催の北欧の服飾・生活調査ツアーに参加、北欧5か国5都市を視察。コペンハーゲンで「北国の服飾のあり方」について座談会を開催。

審議会・各種委員会委員等

- 29・8・3 労働省労働基準局第1回洋裁指導者国家試験委員。
- 34・2～36・3 札幌テレビ放送番組審議委員。
- 34・7～ 北海道生活改善寝具改善委員会理事。
- 34・11～55・1 北海道各種学校教育能力認定委員会試験委員。
- 35・8～55・1 北海道各種学校カリキュラム編成委員。
- 36・8～ 北海道美術館建設期成会理事。
- 37・3～ 札幌テレビ放送番組諮問委員。
- 37・4～ 札幌商工婦人経営研究会監事。
- 37・4～ 札幌商工会議所婦人会理事。
- 37・9～ 北海道読売テレビ放送局審議委員。
- 43・10～51・12 北海道総合開発委員会委員。
- 44・2～46・1 北海道総合開発研究所参与。
- 44・8～47・3 北海道婦人問題研究懇話会委員。
- 44・8～55・1 北海道産業教育審議会委員。
- 45・7～55・1 文部省認可日本洋裁技術検定協会道支部副支部長。
- 46・2～55・1 日本洋裁技術検定協会試験委員。
- 47・4～55・1 札幌市中央区青少年問題協議会委員。

関係団体・婦人団体等社会活動

- 34・4～ 「さっぽろライラック祭り」実行委員。
- 35・7～ 「己六会」会員。
- 36・6～ 「ユーモアクラブ」会員。
- 36・9～ 北海道小児マヒ財団理事。
- 37・8～ 「愛菜会」世話人。
- 37・8～ 北専結婚相談所顧問。
- 39・6～ D・M・J芳和会北海道支部長。
- 39・8～51・1 日本デザイナークラブ（NDC）北海道支部初代支部長。
- 45・6～46・6 国際ゾントクラブ札幌支部初代支部長。
- 46・1～55・1 札幌ユネスコ協会婦人部委員。
- 48・4～55・1 北海道日米協会正会員。
- 49・12～55・1 北海道札幌盲学校後援会理事。
- 51・1～54・1 日本デザイナークラブ本部副理事長。
- 51・7～55・1 世界平和教授アカデミー（DWDA）会員。
- 52・1～55・1 さっぽろモード推進委員会委員。
- 54・4～55・1 日本デザイナークラブ本部顧問就任。
- ?・?～55・1 北方圏調査会会員。

コンテスト等審査委員

- 30・4・17 ワーナー映画・北海道新聞社主催「ミス・ミスターコンテスト」審査員。
- 33・3・8 札幌市主催「ミス・カーニバル選出大会」審査員。
- 33・10・16 日活映画主催「ミス・ミスター北海道選出大会」審査員。
- 33・10・25 余市町主催「ミス観光余市審査会」審査員。
- 33・12・7 北海タイムス社主催「ミス北海道選出総合美容コンテスト」審査員。
- 34・1・5 テレビ放送主催「百万人の娯楽室」（HBC）審査員。
- 34・3・2 産経新聞社主催「全日本服装デザイン・コンテスト北海道地区大会」審査員。
- 34・3・5 HBC主催「第2回スキーカーニバル商社仮装コンクール」審査員。

- 34・3・10 HBC主催「全日本ホーム・カクテル・コンクール」審査員。
- 34・6・13 雪印乳業主催「雪印ミルクの女王選出大会」審査員。
- 35・8・14 松竹映画主催「ミス眠り姫コンテスト」審査員。
- 35・8・23 大映映画主催「足の女王コンテスト」審査員。
- 35・8・26 国際羊毛主催「ミスウール選出大会」審査員。
- 35・9・24 北海道放送・平凡出版主催「ミス・ミスター平凡審査会」審査員。
- 36・5・13 札幌市・毎日新聞主催「観光使節ミス・スズラン選考会」審査員。
- 52・1～55・1 さっぽろモード審査委員長。

ファッションショー等での作品発表

- 22・10～ 「第1回北海ドレスメーカー女学院ファッション・ショウ」を開催（札幌市・札幌藤高等女学校体育館）。以降、学院では毎年開催、現在に至る。
- 24・6・15 「北海ドレスメーカー女学院創立10周年記念ニューモードショウ」を構成・主催。（札幌市中央公民館）
- 26・6・18～20 「学校法人認可記念ファッション・ショウ」を構成・主催。（札幌市中央公民館）
- 26・6・20～22 「学校法人認可記念ファッション・ショウ」を構成・主催。（旭川市公会堂）
- 28・7 NHK一般公開デザインショーに賛助出品。
- 29・9・5～7 「防寒着を主とする婦朝記念浅井淑子デザインショウ」を構成・主催。（札幌市民会館）
- 29・9・10 「防寒着を主とする婦朝記念浅井淑子デザインショウ」を構成・主催。（旭川市公会堂）
- 30・7・25 「新校舎増築記念デザインショウ」を構成・主催。（北海道ドレスメーカー女学院）
- 30・8・7～11 「浅井淑子デザインによる作品展示会」を構成。（札幌市・丸井今井デパート）
- 32・11・9～10 「防寒を主とした冬の生活着ショウ」を主催。（北海道ドレスメーカー女学院）
- 32・11・12～13 「防寒を主とした冬の生活着ショウ」を主催。（札幌市・丸井今井デパート）
- 33・11・15～16 「プチ・コレクション」を構成・主催。（北海道ドレスメーカー女学院及びエイホー）
- 34・2・15 北海タイムス社主催「ファッションショー」に1点出品。
- 34・10・9～10 「創立20周年記念・浅井淑子デザイン・ショウ」を構成・主催。（北海道ドレスメーカー女学院）
- 34・10・14 「創立20周年記念・浅井淑子デザイン・ショウ」を構成・主催。（旭川市公会堂）
- 34・10・17～18 「創立20周年記念・浅井淑子デザイン・ショウ」を構成・主催。（札幌市・丸井今井デパート）
- 37・3 「映画アトラクション・デザインショー」を企画・共催。（開催場所不明）
- 39・11 作品発表「カクテルドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1964～65秋・冬モードショー。（全国の複数都市で開催。以下、NDCモードショーは同じ）
- 40・4 作品発表「カクテルドレス、アンサンブル」日本デザイナークラブ主催、NDC1965春・夏モードショー。
- 40・10 作品発表「コート、アンサンブル」日本デザイナークラブ主催、NDC1965～66秋・冬モードショー。
- 41・3 作品発表「ツーピースドレス、カクテルドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1966春・夏モードショー。
- 41・10 作品発表「ツーピースドレス、コート」日本デザイナークラブ主催、NDC1966～67秋・冬モードショー。
- 42・3 作品発表「ツーピースドレス、イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1967春・夏モードショー。
- 42・5 作品発表「ツーピースドレス、イブニングドレス」ライオンズ国際大会道代表。
- 42・11 作品発表「カクテルドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1967～68秋・冬モードショー。
- 43・3 作品発表「カクテルドレス、ツーピースドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1968春・夏モードショー。
- 43・10 作品発表「コート、ワンピースドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1968～69秋・冬モードショー。
- 44・3 作品発表「ワンピースドレス、パンツアンサンブル」日本デザイナークラブ主催、NDC1969春・

夏モードショー。

- 44・10・18 「旭川分院創立20周年記念ファッションショー」構成・主催。(旭川市・北海ホテル)
- 44・10 作品発表「イブニングドレス、コート」日本デザイナークラブ主催、NDC1969～70秋・冬モードショー。
- 45・3 作品発表「イブニングドレス、アンサンブル」日本デザイナークラブ主催、NDC1970春・夏モードショー。
- 45・10 作品発表「イブニングドレス、ディナードレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1970～71秋・冬モードショー。
- 46・2・20 「71春浅井淑子コレクション」構成・主催。(札幌市・北海道新聞社ホール)
- 46・2・27 「71春浅井淑子コレクション」構成・主催。(旭川市・北海ホテル)
- 46・4 作品発表「イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1971春・夏モードショー。
- 46・7 作品発表「イブニングドレス」札幌ファッションクリエイティブ・東レショー。
- 46・10 作品発表「イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1971～72秋・冬モードショー。
- 47・4 作品発表「イブニングドレスケープ、ワンピースのアンサンブル」日本デザイナークラブ主催、NDC1972春・夏モードショー。
- 47・6 作品発表「イブニングドレス」全国ライオンズクラブ・ファッションショー。
- 47・10 作品発表「イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1972～73秋・冬モードショー。
- 48・4 作品発表「イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1973春・夏モードショー。
- 48・4・10 誌上作品発表「たそがれ(イブニングドレス)」, 北海道女子短期大学研究紀要, 5号, p.149。
- 49・3 作品発表「イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1974春・夏モードショー。
- 49・10 作品発表「イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1974～75秋・冬モードショー。
- 49・12・31 誌上作品発表「クール・フェミニン(イブニングドレス)」, 北海道女子短期大学研究紀要, 7号, p.89。
- 50・3 作品発表「イブニングドレス2点」日本デザイナークラブ主催、NDC1975春・夏モードショー。
- 50・10 作品発表「イブニングドレス2点」日本デザイナークラブ主催、NDC1975～76秋・冬モードショー。
- 51・3 作品発表「イブニングドレス2種」日本デザイナークラブ主催、NDC1976春・夏モードショー。
- 51・3・25 誌上作品発表「清雅(イブニングドレス)」, 北海道女子短期大学研究紀要, 8号, p.105。
- 51・10 作品発表「イブニングドレス、コートドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1976秋・冬モードショー。
- 52・10 作品発表「イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1977～78秋・冬モードショー。
- 52・12・31 誌上作品発表「イブニング・ドレス」, 北海道女子短期大学研究紀要, 10号, p.63。
- 53・3 作品発表「イブニングドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1978春・夏モードショー。
- 53・10 作品発表「ツーピース・ドレスとケープ・コート」日本デザイナークラブ主催、NDC1978～79秋・冬モードショー。
- 53・10 作品発表「イブニング・ドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1978～79秋・冬モードショー。
- 53・12・31 誌上作品発表「イブニング・ドレス」, 北海道女子短期大学研究紀要, 11号, p.205。
- 53・12・31 誌上作品発表「ツーピース・ドレスとケープ・コート」, 北海道女子短期大学研究紀要, 11号, pp.206～207。
- 53・12・31 誌上作品発表「イブニング・ドレス」, 北海道女子短期大学研究紀要, 11号, p.207。
- 54・3 作品発表「イブニング・ドレス」日本デザイナークラブ主催、NDC1979春・夏モードショー。
- 54・12・31 誌上作品発表「イブニング・ドレス」, 北海道女子短期大学研究紀要, 12号, p.123。
- 55・12・31 誌上作品発表「コート・ドレス」(遺作品), 北海道女子短期大学研究紀要, 14号(浅井淑子学園長追悼号), pp.71～72。
- 55・12・31 誌上作品発表「イブニング・ドレス」(遺作品), 北海道女子短期大学研究紀要, 14号(浅井淑子学園長追悼号), p.71・p.73。

※ その他, 国際ライオンズクラブ・コンクール等に賛助出品。

新聞・雑誌等の寄稿・談話及び著書

- 21・11・24 北海日日新聞に「主婦の発言—自然な女性美—」を寄稿。(治部姓)
- 21・12・1 小樽新聞に「調和の美—体に合った衣服の色柄、一寸の工夫で立派な更生服—」を寄稿。(渡邊姓)
- 22・?・? 掲載紙不明「衣しょうの美—洋装は肌色に似合ったものを—」を寄稿。(治部姓)
- 22・?・? 掲載紙不明「わが道を行く」を寄稿。(治部姓)
- ?・?・? 掲載紙不明・考案「家庭—メリヤスシャツで婦人服—」を寄稿。(治部姓)
- 23・11・28～24・1・9 北海道ウイークリーに作品発表と解説「冬のニュールック」を6回連載。(詳細省略。以下、浅井姓)
- 24・1・10～25・3・10 雑誌監修『H・D・M・J BULLTIN』1～8号、札幌HDMJ会発行。(詳細不明)
- 24・1・15 北海道新聞に「手袋とスパッツ」を寄稿。
- 24・6・? 著書出版『服飾図案集』鎌倉書房(東京)。
- 28・12・10 北海タイムス・家庭欄に「デザインは東洋的、渋い好みのパリ婦人—浅井淑子女史フランス便り—」を寄稿。
- 29・1～54・12 北海道ドレメ新聞(47年1月から浅井学園新聞)「服飾講座」常任執筆者。(作品解説等多数。詳細省略)
- 29・2・3 北海タイムスに「案外地味な服装、帽子の被り方も工夫—浅井淑子先生のパリ通信第3信—」を寄稿。
- 29・3・9 北海道新聞で「今春の服飾界—Aラインに移行—」を語る。
- 29・4・11 北海道新聞に「Aラインシルエット2つ—春のコートと夏向きツーピース—」を寄稿。
- 29・4・14 北海タイムス・家庭欄で「春の服装計画—制服を脱いだ人々に—」を語る。
- 29・4・15～5・24 北海タイムスに「家庭の洋裁教室」を25回連載。(詳細省略)
- 29・5・1 北海タイムスに「北欧の生活、完全な子供防寒服—浅井淑子女史滞欧だより—」を寄稿。
- 29・6・3 北海道新聞・家庭娯楽欄で帰国談「人情に厚い北欧—服装にも学ぶ点が多い—」を語る。
- 29・6・19 北海タイムスの帰国あいさつで「伝統の美を生活に—パリの流行は輸出もの—」を語る。
- 29・7・6 北海道新聞に「ひとこと—写真迷作展—」を寄稿。
- 29・7・15 北海日日新聞で欧州の流行を「パリはシックなものが多く」と語る。
- 29・8・4 北海タイムスに「盛夏の街着—大きいカラーの若々しいツーピース—」を寄稿。
- 29・8・8 北海道新聞に「スタイル拝見—ぞうりは禁物、パンプスには帽子を—」を寄稿。
- 29・8・17 北海タイムスに「モード—新鮮な衿元のツーピース—」を寄稿。
- 29・11・7 北海タイムスに「これからの普段着—ワインカラーの外出着—」を寄稿。
- 29・11～40・12 講談社発行月刊誌『婦人倶楽部』常任洋裁執筆者。(誌上発表作品のデザイン及び製作法の解説。詳細省略)
- 29・12・15 北海タイムスに「オーバー拝見—シンプルな帽子を—」を寄稿。
- 29・12・23 北海タイムスに「クリスマスの装い—上品ななかに秘められた華やかさ—」を寄稿。
- 30・3～31・12 中央出版社発行月刊誌『家庭の友』に作品紹介を連載。(詳細省略)
- 30・4～40・3 鎌倉書房発行月刊誌『ドレスメーカー』常任洋裁執筆者。(誌上発表作品のデザイン及び製作法の解説。詳細省略)
- 30・9・1 北海道新聞に「今秋の服装傾向」を寄稿。
- 30・9～40・12 講談社発行月刊誌『若い女性』常任洋裁執筆者。(誌上発表作品のデザイン及び製作法の解説。詳細省略)
- 31・2・6 北海道新聞・家庭欄に「制服を脱ぐ人々へ—服装プランのたて方—」を寄稿。
- 31・2・6～31・4 北海道新聞に「洋裁教室」を連載。(毎週1回、3か月間。基礎知識から実物製作まで。詳細省略)
- 31・5～31・8 北海タイムスに「服飾講座」を連載。(毎週1回、3か月間。デザイン面からの服装解説。詳細省略)
- 31・11・22 北海タイムス「家庭—冬のおしゃれ座談会(上)—」に出席。
- 31・11・23 北海タイムス「家庭—冬のおしゃれ座談会(下)—」に出席。
- 31・12・20 北海タイムスに「ホームウェアについて」を寄稿。
- 32・3・11 北海タイムス主催の座談会「華やかな春の装い—'57年度のモードを作る人々が語る—」で司会。

- 32・7・31 北海タイムスに「ビジネスガールのブラウスを着こなすコツ」を寄稿。
- 32・10・24 北海道新聞で「ディオール氏の思い出」を語る。
- 32・11・23 毎日新聞に「実用的な生活着」を寄稿。
- 33・5・6 北海タイムス・新聞座談会「爽やかな五月の装い講座」に出席。
- 33・9・21 北海道新聞・婦人欄に「世界の婦人—フランス—」を寄稿。
- 34・1・15 北海道新聞の連載「人それぞれ（7）」でインタビューに答える。
- 34・2・14 北海タイムスで「贈物のエチケット—バレンタインデーに寄せて—」を語る。
- 34・2・16 婦人公論・雑誌対談「衣生活さまざま」に出席。（大宅壮一と対談）
- 34・4・18 読売新聞・新聞座談会「新聞に望む」に出席。
- 34・6・16 朝日新聞に「スタイルブック街に行く」を寄稿。
- 34・8・2～34・12・26 北海道新聞に「お母さんデザイナー」を連載。（全6回。容易にできる洋裁教室。詳細省略）
- 34・8・13 北海タイムスに「映画に表れたモード」を寄稿。
- 34・9・27 北海道新聞の連載「天狗（11）—料理—」に寄稿。
- 34・10・7 北海タイムスに「暮しに生きる新聞広告」を寄稿。
- 34・12・8 週刊読売に「スキースタイル」を寄稿。
- 35・3・2 北海タイムスの連載「私の好きな店（14）」に寄稿。
- 35・3・10 大東紡績社報に作品紹介「千鳥格子で若向きのスーツ」を寄稿。
- 35・3・17 北海タイムスの連載「ベストドレッサー登場（2）」に寄稿。
- 35・6・9 北海道新聞・家庭欄で「パパのおしゃれ—渋さと清潔な感じ—」を語る。
- 35・6・22 北海タイムスに「若々しい夏の装い—格子と流行の紫を使って—」を寄稿。
- 35・10・30 北海タイムスに「職業婦人の服装」を寄稿。
- 35・12・2 北海タイムス・家庭欄で「チャーミングになるために」を語る。
- 35・12・2 北海タイムスに「わが家の夜食」を寄稿。
- 35・12・21 読売新聞に「随想1960年（11）—道独自の被服作りにひと役—」を寄稿。
- 36・4～36・6 北海タイムスに「おしゃれ手帖」を連載。（毎週1回、3か月間。年齢・職業に即した衣のあり方。詳細省略）
- 36・4・20 読売新聞に「暮らしの案内—春の洋装—」を寄稿。
- 36・6・30 北海道新聞・家庭欄に「こども用のかわいいエプロン—着やすい胸当てから続いた形—」を寄稿。
- 37・1・20 ホームジャーナル（朝日新聞発行）に「団地ムードというもの」を寄稿。
- 37・2・8 北海タイムスに「週間服装メモ—コートと足元に目を—」を寄稿。
- 37・2・15 北海タイムスに「週間服装メモ—目立つオーバーのよごれ—」を寄稿。
- 37・2・22 北海タイムスに「週間服装メモ—学巣を出る方のプラン—」を寄稿。
- 37・3・1 札幌新聞・ろばた欄に「雪まつり雑感」を寄稿。
- 37・3・1 「ALC洋裁店—若い人のためのツーピース2点—」ALC（朝日女性サークル機関誌，朝日新聞発行），？号，pp.16～17。
- 37・3・24 北海道商業新聞に「流行色と生地」を寄稿。
- 37・3・24 朝日新聞・おしゃれ欄に「コートとブーツ—雪どけの工夫を—」を寄稿。
- 37・3・24 札幌新報で「春の婦人靴—難しいカラー—」を語る。
- 37・5・31 北海タイムスに「服飾と古美術」を寄稿。
- 37・7・1 「ALC洋裁店—魅力的でロマンティックなサマー・モード—」ALC（朝日女性サークル機関誌，朝日新聞発行），27号，pp.6～7。
- 37・7・14 市政グラフ（札幌市発行）に「私の推薦する札幌の風物詩」を寄稿。
- 37・9・1 北海道放送社報に「北海道の文化向上は我々の手で」を寄稿。
- 37・9・9 北海道新聞で「結婚このごろ」を語る。
- 38・5～46・10 北海道警察本部発行（北海道警察本部北海警友編集部編）月刊誌『北海警友』に「暮らしの服飾」を連載。（18巻5号～26巻10号，毎月2ページ組みで，8年6か月にわたり執筆。詳細省略）

- 39・4 論文監修「北海道における婦人の下肢保温について—その実態を中心として—」北海道私学教育研究協会研究紀要, 2号, pp.21~38。(北海道ドレスメーカー女学院が昭和38年度の研究校に指定され, 阿部文男・宮岡美恵子などが調査等を行い, 浅井淑子が監修で論文にまとめたものである)
- 42・4・5 婦人新報に「サンドイッチ人生」を寄稿。
- 45・4・10 北海道新聞に「自分でつくることも専科—ベストとパンタロン—」を寄稿。
- 45・6・10 北海道新聞に「自分でつくることも専科—外出用ワンピース—」を寄稿。
- 45・7・4 北海道新聞に「自分でつくることも専科—女の子の遊び着—」を寄稿。
- 45・7・7 自由新報に「堂垣内尚弘さんと私」を寄稿。
- 45・9・5 北海道新聞に「自分でつくることも専科—多目的に着られるワンピース—」を寄稿。
- 46・3・1 座談会「女性にとって大学教育は必要か」虹(虹社発行), 3巻3号, pp.36~40。
- 46・5・29 北海道新聞に「自分で作る—アプリーケのあるワンピース—」を寄稿。
- 46・7・17 北海道新聞に「自分で作る—ビーチウエア—」を寄稿。
- 46・11・13 北海道新聞に「自分で作る—ホームウエア—」を寄稿。
- 46・12・22 北海道新聞に「自分で作る—プレーンなワンピース—」を寄稿。
- 47・2・8 北海道新聞・随想欄に「北方的な服飾美」を寄稿。
- 47・2・11 北海道新聞に「自分で作る—ラウンジ・ウエア—」を寄稿。
- 47・5・13 北海道新聞に「自分で作る—オーバーブラウス—」を寄稿。
- 47・9・30 北海道新聞に「自分で作る—キュロットのジャンパースカート—」を寄稿。
- 47・10・28 北海道新聞に「自分で作る—ラップ式打ち合いの上着—」を寄稿。
- 47・11・ 北海道新聞に「自分で作る—ブリーツスカート—」を寄稿。
- 48・1・13 北海道新聞に「自分で作る—パンタロンに合うベスト—」を寄稿。
- 48・2・16 北海道新聞に「自分で作る—ブリーツのあるドレス—」を寄稿。
- 48・4・10 「兄玉潤先生のご勇退に際して」北海道女子短期大学研究紀要, 5号, pp.1~2。
- 48・5・25 HBC週刊パックに「学校経営スタート」を寄稿。
- 50・2・28 HBC週刊パック(137号)で「服装にみる女の50年史—増えた装い上手—」を語る。
- 50・6・1 対談「主人あつての学園—がんばり通した30年—」(対談・夫を語る)月刊さっぽろ, 17巻6号, pp.66~72。(聞き手; 飛弾誠)
- 51・1・6 毎日新聞に「フード—おしゃれも兼ねて寒さから守る—」を寄稿。
- 51・1・11 毎日新聞・文化と風土シリーズに「服飾—防寒モードに情熱—」を寄稿。
- 51・1・30 「教育に対する意見—『教育』の原点からの出発—」教育振興(北海道教育振興会・札幌市教育振興会発行), 7号, p.4。
- 51・2・1 随筆「島の婦人を偲びつつ」月刊ダン(北海道新聞社発行), 4巻2号, pp.144~145。
- 51・2・2 毎日新聞に「ラップ・スカート—足腰の冷えを防ぐ家庭着—」を寄稿。
- 51・3・1 毎日新聞に「キルティング・ベスト—チャンチャコを応用して—」を寄稿。
- 51・4・2 毎日新聞に「重ね着のダスターコート—ほこりっぽい風から体を守る—」を寄稿。
- 51・5・7 HBC週刊パック(198号)に「わが母の思い出—決してほめない, 他人には親切—」を寄稿。
- 51・9・1 論文監修「被服素材の風合調査研究—婦人服素材によるイメージプロフィール—」北海道私学教育研究協会研究紀要, 41号(各種学校編), pp.17~37。(北海道ドレスメーカー学院が昭和51年度の研究校に指定され, 澤田幸子などが調査を行い, 浅井淑子が監修で論文にまとめたものである)
- 52・1・1 月刊北海グラフの新春閑談で「わたしたち已年です—ことしはやりますよ—」を語る。
- 52・2・1 毎日新聞で「古い毛皮の再生—カラーやカフスに—」を解説。
- 52・7・10 視察報告「教えられること・考えさせられること—デザイナーたちが見て来た北国のモードと生活—」季刊北方圏(北方圏情報センター発行), 20号, pp.52~55。
- 53・4・1 対談「おんなの装いに君臨40年」(四季対談)月刊ダン(北海道新聞社発行), 6巻4号, pp.118~122。(北川日出治と対談)
- 54・9・25 著書(分担執筆)「服装の歩み—女性を中心に固有の風俗からさっぽろモードまで—」『札幌風土記』(さっぽろ文庫10, 札幌市教育委員会文化資料室編, 北海道新聞社発行) pp.194~209。

※ 雑誌・新聞等において、服飾・教養記事又は随筆等を多数執筆。

制服・衣装等のデザイン

- 18・？ 国の制定した標準服に準じて、冠婚葬祭用婦人服をデザイン。
- 21・12 北海道ドレスメーカー女学院の生徒制服をデザイン。
- 33・3 札幌市立旭丘高等学校の女子生徒制服をデザイン。
- 34・3 名寄市立名寄女子短期大学の学生制服をデザイン。
- 34・10 ミス婦人公論の衣装をデザイン。
- 35・12～36・6 ミス・ワールド日本代表の渡英用衣装をデザイン。
- 36・6 観光使節ミス・スズランの国内主要都市訪問用衣装をデザイン。
- 37・4 雪印乳業株式会社の女子社員制服をデザイン。
- 37・9 ミス・ウール道代表の国内主要都市訪問用衣装をデザイン。
- 38・10 北海道女子短期大学の学生制服をデザイン。
- 47・2 大麻幼稚園（大麻第2幼稚園も同じ）の園児制服をデザイン。

講習会・講演会等講師

- 23・7～32・3 全道高等学校家庭科教員再教育被服科講師。
 - 24・7～27・7 札幌市社会教育指導者成人学校洋裁講師。
 - 28・7～33 北海道労働基準局・洋裁士技能者養成講師。
 - 29・6～34・3 札幌鉄道弘済会洋裁教習所顧問兼講師。
 - 29・7・18 第4回教育の集い講習会講師。
 - 29・9・24 札幌地区洋裁技能者養成検定試験講習会講師。
 - 33・8・11 北海道編物連盟服飾研究講座講師。
 - 34・2・10 旭川市ロータリークラブ・ゲストスピーチ講師。
 - 34・2・25 伊達町青年学級講師。
 - 34・8・16 シャンソン友の会服装教室講師。
 - 34・8・21 松下電気被服講師会講師。
 - 35・9・1 札幌チャーミングスクール講師。
 - 35・12～ スターズメーカーズ・スクール札幌分校講師。
 - 35・12・10 日本看護協会北海道支部・洋裁講座講師。
 - 36・9・14 拓殖銀行女子社員洋裁講座講師。
 - 37・4・1 防衛大学同窓会講演会講師。
- ※ 全道各地の中学校・高等学校等での教育講演，老人大学・ロータリークラブ・ライオンズクラブ等での講話・講演など多数。

ラジオ・テレビ放送への出演等

- 28・7・18～8・29 ラジオ放送「HBC服飾講座」（HBC）に出演。（原型の裁ち方から仕上げまで）
- 29・6・16 ラジオ放送「ヨーロッパから帰って」（NHK）に出演。
- 29・6・22 ラジオ放送「ヨーロッパから帰って」（HBC）に出演。
- 29・7・19 ラジオ放送「服飾について」（NHK）に出演。（対談）
- 30・1・9 ラジオ放送「服飾計画・婦人物」（HBC）に出演。
- 30・1・16 ラジオ放送「服飾計画・子供物」（HBC）に出演。
- 30・3・6 ラジオ放送「学窓を巣立つ人のために」（NHK）に出演。
- 30・3・16 ラジオ放送「主婦日記」（NHK）に出演。
- 30・4・29 ラジオ放送「楽しい春の子供服について」（HBC）に出演。
- 30・5・7 ラジオ放送「朝のインタビュー」（HBC）に出演。
- 30・6・2 ラジオ放送「雨の日のおしゃれ」（HBC）に出演。

- 30・7・1 テレビ放送「テレビに期待する」(HBC)に出演。(座談会)
 - 32・1・20 ラジオ放送「社会放談」(HBC)に出演。
 - 32・5・8～6・19 ラジオ放送「主婦日記」(NHK)に出演。(3回, 服飾・美容について)
 - 32・8・7 テレビ放送「私のアルバム・フランス編」(HBC)に出演。
 - 33・3・13 ラジオ放送「高校卒業生のために」(HBC)に出演。
 - 33・3・20 ラジオ放送「無流行時代について」(NHK)に出演。
 - 33・11・4 ラジオ放送「思い出を語る」(HBC)に出演。
 - 33・12・7 ラジオ放送「ストーブを囲んで」(NHK)に出演。
 - 33・12・13 テレビ放送「百万人の娯楽室」(HBC)に出演。
 - 34・1・12～17 ラジオ放送「ホームクイズ」(HBC)に出演・出題。(連続6回)
 - 34・1・27 ラジオ放送「マイク片手に」(NHK)に出演。
 - 34・1・31 ラジオ放送「ラッキー・テレフォン」(HBC)に出演。
 - 34・3・10 ラジオ放送「ストーブを囲んで」(NHK)に出演。
 - 34・3・11 テレビ放送「暮らしのしおり」(HBC)に出演。
 - 34・3～36・3 テレビ放送「家庭メモ・服飾講座」(STV)を常任担当。
 - 34・4・2 テレビ放送「東洋レーヨンファッションショー」(HBC)に出演・作品発表。
 - 34・7・22 テレビ放送「そよ風を着る—今夏のモード—」(NHK)に出演。(解説及び作品ショー)
 - 34・7～36・7 テレビ放送「教養講座・暮らしのしおり」(NHK)を担当・出演。(2か月に1回)
 - 34・8・16 テレビ対談「日曜訪問」(STV)に出演。
 - 35・7～55・1 テレビ放送「服装講座」(HBC)を常任担当。
 - 35・7・11 テレビ放送「たのしいジュエリ」(HBC)に協賛作品出品。
 - 37・3～ テレビ放送「家庭メモ・服装関係」(STV)を担当。
 - 37・4・6 テレビ放送「おくさんこんにちは『家庭メモ』—家事よもやま—(座談会)」(STV)に出演。
 - 48・10・21 テレビ放送「お早う・草柳大蔵です」(STV)に出演・対談。
- ※ テレビ・ラジオにおいて、作品の発表、新しい傾向の解説など、又は教養番組の司会・対談等に多数出演。

受賞・受章等

- 38・3・26 北海道知事賞(第1期北海道総合開発功労)受賞。
- 43・12・14 北海道知事表彰(私学教育功績)受賞。
- 52・11・30 札幌市民文化奨励賞(服飾分野)受賞。
- 55・1・4 正六位勲五等宝冠章(私学教育功労)受章。
- 55・9・2 北海道開発功労賞(私学の振興と服飾文化の普及に貢献)受賞。

浅井淑子先生に関する記事・出版物等

- 28・1・15～現在 『北海道ドレメ新聞』(隔月刊。32年8月号・第25号からは月刊。47年1月号・第184号からは『浅井学園新聞』〔月刊, A3判, 4～6ページ組み〕と改め、現在に至る)
- 29・9・? 北海日日新聞の連載「女傑」ここにあり(16)で紹介される。
- 29・10・26 北海日日新聞の連載「悪友良友(30)」で紹介される。
- 29・12・11 掲載紙不明の連載「長の座の悩み(11)」で紹介される。
- 30・1・13 北海タイムスの連載「日本のえくぼ(12)」で紹介される。
- 30・10・13 北海タイムスの連載「サッポロの人脈(37)—洋裁学校デザイナーの巻—」で紹介される。
- 31・1・12 北海日日新聞の連載「新春女人抄(9)」で紹介される。
- 34・7・15 北海タイムスの連載「大当り一代(90)—本道の“ドレメ教祖”—」で紹介される。
- 35・5・? 毎日新聞の連載「人間雑記帳(16)」で紹介される。
- 37・2・2 北海タイムスの連載「北海道の百人(27)」で紹介される。
- 37・8・22 北海タイムスの連載「さっぽろの顔(25)—ドレメ王国のママ先生—」で紹介される。

- 39・10・16 北海道ドレスメーカー女学院編集・発行『創立25周年記念の葉』12頁。
- 44・10・11 北海道ドレスメーカー女学院編集・発行『北海道ドレスメーカー女学院創立30周年記念・北海道ドレスメーカー女学院旭川分院創立20周年記念葉』14頁。
- 45・1・10 「人物の周辺 ^{はがね} 鋼の意志をマシユマロで包んだ魅力！浅井淑子」北海グラフ（グラフ札幌発行），2巻2号，pp.38～43。
- 46・11・1 浅井淑子（回想録）「女性の解放をみずからの体験で」虹（虹社発行），3巻11号，pp.116～120。
- 47・8 「おんなの学校—洋裁教育に34年—」ろんだん北海道（論壇出版社），134号，p.27。
- 51・2・1 新聞・放送記者座談会「ベテラン・ジャーナリストが選んだ北海道を動かす100人」月刊ダン（北海道新聞社発行），4巻2号，pp.43～52(51)。
- 52・1・10 札幌テレビ放送開発室編「浅井淑子 燃える女のファッション論」『日曜の朝30分 草柳大蔵と考える—人生と仕事と風土と—』楡書房発行，pp.238～245。（テレビ対談集）
- 53・7・20 河邨文一郎「浅井淑子」『河邨文一郎・わが交友記』まんてん社発行，pp.112～118。
- 54・10・15 学校法人浅井学園編集・発行『浅井学園創立40周年記念誌』92頁。
- 55・12・31 北海道女子短期大学編集・発行『北海道女子短期大学研究紀要』14号（浅井淑子学園長追悼号），pp.1～12（関係分）。
- 56・3・15 北海道総務部編『北海道開発功労賞 受賞に輝く人々（昭和55年）』北海道発行，pp.139～209（梶浦善治ほか執筆「私学の振興と服飾文化の普及 浅井淑子」）。
- 56・8・20 「浅井淑子」『北海道大百科事典』（上巻）北海道新聞社編・発行，p.50。
- 58・9・18 北海道女子短期大学編集・発行『創立二十年 北海道女子短期大学』334頁。
- 60・11・1 学校法人浅井学園編集・発行『追想—浅井淑子を偲ぶ—』203頁。
- 64・10・1 学校法人浅井学園編集・発行『浅井学園創立五十周年記念誌』135頁。
- 平成5・9・30 北海道女子短期大学編集・発行『創立三十年 北海道女子短期大学』335頁。
- 平成11・3・31 一番ヶ瀬康子「浅井淑子先生より学ぶ—北海道発ものの見方—」北方圏生活福祉研究所年報，4巻，pp.1～4。

（年譜の作成にあたっては，資料の収集や事実の確認などの作業で，学園関係の図書館・秘書室・事務局をはじめ，旧職員・関係機関・関係団体等の多大な協力と支援を得た。心から感謝を申し上げたい）